

われら信濃川を愛する「信濃川自由大学」

第12回 水都・新潟の復活に向けて
～ 信濃川が育んだ田園型政令市～

日 時：平成 18 年 10 月 12 日（木）13：30～15：30

会 場：新潟テルサ・大会議室

ゲスト：長谷川義明氏（NPO 法人新潟愛郷会会長 / 前新潟市長）

ホスト：鈴木聖二氏（新潟日報社編集委員）

（司 会）

大変お待たせいたしました。ただ今より「われら信濃川を愛する『信濃川自由大学』」を開校いたします。

本日はお忙しい中、ご来場いただきまして誠にありがとうございます。私、本日の司会進行を務めさせていただきます F M けんとの坂井英里子です。どうぞ、よろしく願いたします。

信濃川自由大学は、信濃川の自然や歴史など、その魅力を広く地域の方々に知っていただくために開校し、毎回信濃川にゆかりのあるゲストの方々からさまざまなお話をお聞きしております。本年度は今回が最後となります。今までご出席いただきまして、ありがとうございました。来年度も開催を予定しておりますので、その際は是非ご参加いただきたいと思っております。

なお、今後の予定については、「信濃川自由大学」のウェブページなどでご案内をさしあげてまいります。また、過去の講座に関しましても、「信濃川自由大学」のウェブページで議事録を公開しています。お手元の資料にアドレスが記載してございますので、そちらからご覧ください。

それでは、はじめに主催者を代表いたしまして、信濃川下流河川事務所所長・上谷昌史よりご挨拶申し上げます。

（上 谷）

ただ今、ご紹介いただきました信濃川下流河川事務所の上谷でございます。まずは本日、多くの方にお集まりいただきまして、誠にありがとうございました。それから併せまして、本日 12 回目を迎えることができましたことも皆様方のおかげと、重ねてお礼を申し上げます。

この信濃川自由大学は、昨年度パート 1、本年度パート 2 と進めてきまして、今日で 12 回を数え、一区切りをつける形となりました。しかし、これまでともしてきた灯を消さない、それから地域と信濃川をつなぐ糸を切らせないということが重要ではないかなと思っております。

さて、本日は新潟愛郷会理事長の長谷川様にお越しいただきました。お話はまちづくりという観点で、地域と信濃川をつなぐ話をお聞かせいただけということでございます。私も信濃川というフィールドで仕事をしているわけですが、そういう仕事に携わる者として非常に本日の話は楽しみにしているところでございます。皆様方におかれましても、15 時半までという非常に限られた時間ではあるのですが、十分お楽しみいただければと思っております。

それと併せて、本日、参加していただいたことをきっかけに、地域と信濃川ということを考えていただければと思っております。以上、簡単ではございますが、主催者を代表し

て挨拶をさせていただきました。それでは長谷川様、よろしくお願いいたします。

(司 会)

ありがとうございました。それでは、第 12 回講座に移らせていただきます。今回の講座のテーマは「水都・新潟の復活に向けて～信濃川が育んだ田園型政令指定都市～」です。本日はゲストスピーカーに、現在は N P O 法人新潟愛郷会理事長で、前新潟市長の長谷川義明さんをお迎えしています。ホストは鈴木聖二新潟日報社編集委員が務めます。

まず、お二人のプロフィールをご紹介させていただきます。はじめに、長谷川義明さんをご紹介いたします。長谷川さんは昭和 9 年、新潟市にお生まれになり、昭和 33 年、当時建設省、現在の国土交通省に入省し、都市局都市防災対策室長、住宅局市街地建築課長などを歴任され、昭和 60 年 6 月、新潟市助役に就任されました。そして平成 2 年 11 月より平成 14 年 11 月まで新潟市長を 3 期務められ、現在はふるさと新潟の魅力づくりを推進する目的の N P O 法人新潟愛郷会理事長を務められています。

次に、鈴木聖二さんをご紹介いたします。鈴木さんは昭和 29 年、石川県金沢市にお生まれになり、昭和 51 年、新潟日報社に入社されました。本社報道部の経済、県政、新潟市市政記者クラブ、長岡、東京支社などで取材記者、その後、報道部デスクなどを経て、現在は編集委員兼情報文化センター情報文化部部長を務められています。

それでは長谷川理事長、鈴木編集委員をお迎えいたします。皆様、大きな拍手でお迎えください。それでは、ここからの進行は鈴木編集委員にお願いいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

(鈴 木)

新潟日報社情報文化部の鈴木と申します。今ほどご紹介いただいたとおり、編集委員も兼務させていただいております。

先ほど所長からお話がありましたけれども、この信濃川自由大学という企画は、長岡市にある国土交通省信濃川河川事務所と、新潟市にある信濃川下流河川事務所が、川というのは防災の機能とか、水を供給する機能、様々な機能があるのですが、それだけではなくて、もっと人間の生活の様々な側面からかかわっている文化としての川、そういう幅広い川を地域とのつながりの中で考えていきたいということを企画されまして、新潟を象徴する信濃川を地域文化のかかわりの中で考えていくということであれば、私も新潟日報社も是非一緒にやらせていただきたいということで、共催ということで取り組ませていただきました。お手元の資料をご覧くださいいただければ分かる通り 1 回目、今年の 10 月、ちょうど 1 年前になりますけれども、長岡市で前長岡市立中央図書館長の稲川明雄先生をお招きして第 1 回を開催して以来、自然、動植物、歴史、産業、本当に多様な方々に講師を務めていただけてきました。私もほとんど出させていただいてお話を聞かせていただいたり、今日のように進行役、ホスト役を務めさせていただいたりしましたけれども、やはり感心するのは、信濃川というものがこれほど深く人間の暮らしに関わっているのかと、頭の中で分かっていたつもりでも、それぞれの専門の方々の話を伺うと、本当に驚くようなことが多くありました。前半の 6 回については既に講義録をまとめた本も出ておりますし、後段についてもまとめられるご予定だと伺っております。

それらを踏まえて、今日が一応初年度の最終講義ということで、やはりそれにふさわしく 367 キロメートルにわたる大河のゴール地点、河口の新潟市を会場に新潟のまちづくりと信濃川のかかわりを話していただこうと、非常に有意義なことだと思うのです。信濃川の河口に浮かんだようなまちですから、それこそ何から何まで信濃川の中でできあがってきたまちなわけですから、それをこれだけの限られた時間で語るということは非常に大変なことだとは思いますが、それを語るにあたって長谷川さん以上にふさわしい人は考えられないと、先ほどご紹介の中にもありました建設省で都市局、住宅局というまち

づくり、地域づくりを専門に担当されてきました。しかもご本人は新潟市の学校町生まれという、子どもの頃、信濃川で泳がれたことがあるという話も打合せの時に聞きしました。新潟に生まれ、新潟に育ち、しかも故郷に帰って12年間にわたって市政を担当された。来年、政令市になる新潟市ということですが、その土台を3期12年にわたって務めてこられた。退任後は、さらに地域に貢献されたいということで新潟愛郷会というNPOを自ら設立なさって、取り組んでおられる。今日は信濃川と新潟のまちづくりの歴史、それから現在のまちづくり、それから今後の方向性等々についてお話を伺うわけですが、それだけではなくて、長谷川さんの新潟というまちへの愛情とか、そういう気持ちもお話しいただけたらと思っています。一つ、よろしく願います。それで、もうタイトルが出ていますが、始める前に一言あったら。

(長谷川)

ありがとうございます。大変詳しい紹介もしていただきまして、ありがとうございます。今、お話がありましたように、私は新潟の学校町の生まれです。現在、市役所の建っている町内で生まれましたので、海にも近いし、信濃川にも近いというところで育ちました。幸い、まちづくりに関する仕事をずっとやることができましたので、新潟市の助役に来ないかと言われた時に喜んで帰ってきたわけでご覧になって、その後、新潟市長になると思っていなかったのですが、市長に当選することができて、今まで自分が勉強してきたことを、新潟のまちづくりにできるだけのことをやりたいという気持ちで取り組んでまいりました。

今日は、その成果の一部が画面にも出るかと思いますが、決して満足しているわけではありませんが、また、自慢するわけでもありませんが、まさにまちづくりというのは三つの条件があると思うのです。一つはその地域地域の持っている土地の固有の条件にいかにか立脚しているかということが非常に大きなことだと思います。それからもう一つは、その時代のまちづくりに関する社会的な要請があると思いますが、そういったものをいかに反映するかということがあります。もう一つは技術的な水準、その時代時代の守ってきた技術が発展してまいりますけれども、そういった技術的な水準に則してまちづくりが行われていくか、この三つは非常に大きな基本的な条件ではないかなと思います。そういう意味で、今日はいろいろと絵をお見せしますけれども、それらの中に今申し上げる三つの条件に基づいて、時代時代にどんなまちが作られてきたかというお話をさせていただければありがたいと思います。

(鈴木)

今おっしゃられた三つの条件の中の固有の街の持っている財産、それを作りあげてきたまちづくりの歴史と信濃川ということで、まずパワーポイントを使いながらお話をいたしたいと思います。願います。

(長谷川)

これは現在の新潟市、合併した後の広域的な新潟市になります。大河津分水がここにあるわけですが、大河津分水からずっと東の方に東港という掘り込みの港湾を造っているわけですが、こちらの方までが旧新潟市、この先に聖籠、豊栄があります。これは豊栄の市街地です。だいたいこの図面全体が新しい新潟市の区域になっているとご理解していただいているのではないかと思います。信濃川の河口があり、阿賀野川の河口があるという状況です。赤



図 - 1 新潟都市圏域図

いのは市街化している部分です。市街地でございます(図 - 1)。

これが、かつて阿賀野川と信濃川の河口が一緒になって流れていた時代の図面、その後、1731年に阿賀野川が真っ直ぐ松ヶ崎浜から日本海へ直流するわけですから、それ以前の復元の図面ということになります。ご覧のように信濃川の流域にたくさんの潟があります。大きな潟もありますが、これらの潟の水は全部阿賀野川水系、信濃川水系とも本川に流れ込んできて、この河口から海に出ているのです。茶色でここに書いてあるのは砂丘列でございます。砂丘列というのは氷河時代が終わって、だんだん地球温

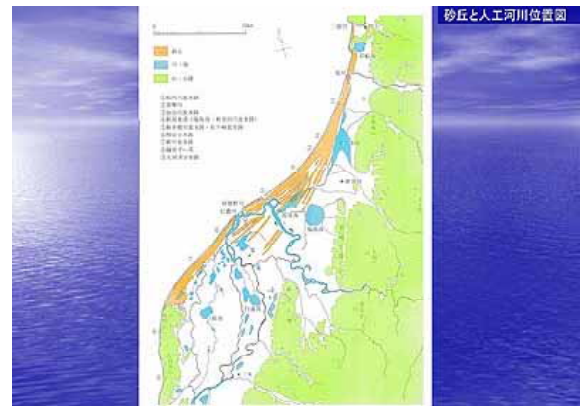


図 - 2 砂丘と人工河川位置図

暖化に伴って雨によって土砂が流れ出てくる、その流れ出てくる土砂が冬季風浪によって押し戻されて、砂丘を形成するという歴史の繰り返しです。12000年前くらいに氷河期がだいたい終わるわけですが、それからずっとこういう形成が進んでまいりました。この辺に砂丘がないのは地盤の沈下、沈降などで消えてしまっているというところなのです。これがだいたい13列くらいあると言われていますが、ここに自然河川の阿賀野川河口、信濃川河口が一緒になったり離れたりしているのですけれども、この両河の河口からずっと荒川までの間に現在、海に出ているいろいろな川がありますけれども、それらは全部人工的に掘った川ということでございます。つまり、この地域の人にとっては早く水を海に抜くことによって乾田化して、米の生産を上げることが居住にとって非常に重要な課題であったと言えると思います(図 - 2)。

これは旧新潟市内で約6000年前、笹山前遺跡から出てきた縄文の土器でございます。これはまだ私が市長をやっている時に出てきたのですから、比較的新しいです。これは縄文と言っても6000年前ですから縄文前期に当たるのですけれども、縄目ではなくて、一つ一つをヘラで彫った大変丹念な土器でございます。これは「みなとぴあ」、歴史博物館の中に展示してございますので、是非ご覧いただきたいと思いません。底の裏面にも全部彫ってあると。有名な火焰土器はだいたい4000年から4500年くらい前



図 - 3 笹山前遺跡縄文土器

の土器でございますから、それよりもずっと前に、既にこういう大変緻密な彫り物を施した土器を持った人が、新潟の平野に住んでいたこととなります(図 - 3)。

その笹山前遺跡が出てきた地域に蔵岡公園という名前ですが、縄文の公園を今造っております。縄文時代にあつたであろう木を植えて、縄文の生活がここで体験できるようにしようということで造っております。いよいよ平成19年度のうちには完成するところまでできていますので、機会があつたら是非行っていただきたいと思いません。

(鈴木)

どこら辺にあるのですか。

(長谷川)

あった場所は、阿賀野川の一番奥の砂丘、第1砂丘と呼んでいます。第1砂丘列の阿賀野川の付け根の辺りに、新潟で言うと大江山地区なのですけれども、大江山地区から発掘されたのです。そこで、ここに蔵岡公園を造っているということでございます。砂丘全体を年代順に第1砂丘列、第2砂丘列、第3砂丘列と分類しており、古町周辺は第3砂丘列にあたります。これが鳥屋野潟でございます。なお、山という名前が付くのはだいたい砂丘の上なのです。第1砂丘列には大江山地区、亀田の北山もここに入りますけれども、それから第2砂丘列に石山とか山二ツとか、海岸にきますと第3砂丘列の物見山とか日和山とか、こういった山という名前が付くのはだいたい昔の砂丘列の上、安全な場所です。新潟地震の時もそうですし、出水の時もそうですが、砂丘と砂丘の間でだいたい浸水被害、あるいは地震による倒壊、要するに地盤が軟弱なのです。そういったことが起きているということが分かります(図-4)。



図 - 4 蔵岡公園(仮称)

これが、実は5000年前の噴火口跡と書きましたが、会津坂下から只見川を田子倉ダムの方向上流に向かいますと、左側に沼沢湖という湖がありますが、実はこれが5000年前に噴火した沼沢火山の火口湖、カルデラ湖でございます。現在、こんなに静かな湖になっています。まさに山の中の静かな湖畔の森の影という感じで、ここにキャンプ地などもあります。是非、お訪ねになっていただきたいと思っております(図-5)。

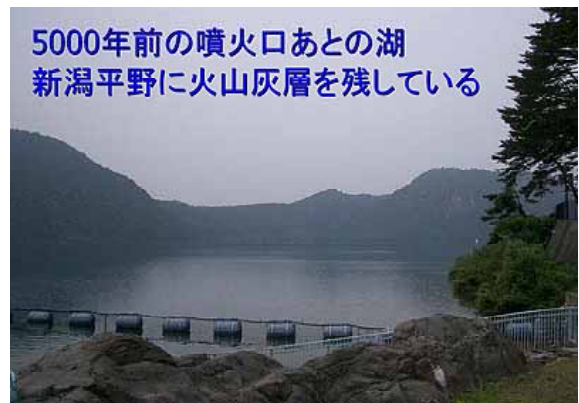


図 - 5 沼沢火山の火口湖

この5000年前の噴火口の沼沢湖ですけれども、沼沢火山の火山灰層が新潟の平野に分布しているわけです。それによって5000年前にどの辺までが陸であったかということが分かるのです。これが分かったのが最近のことでございます。新潟大学の小林昌二教授を中心とするグループが山の下周辺でボーリングをいたしまして、そのボーリングの中から火山灰層を発見したと、つまり、あの地域が5000年前の火山灰が降る時期に既に陸化していたということが分かったのです。それによって、かつての滯足柵(ぬたりのさく)であるとか、蒲原の津というような歴史上の場所が、こういった第3砂丘列のところにあったということがだんだん物証として分かってきた。それまでは、滯足柵であるとか、蒲原の津というのは新津にあったのではないかと、岩室辺りにあったのではないかと、いろいろな学説があったのでございますが、最近では第3砂丘列のところにあったであろうということが、だんだんはっきりしてきているということなのです(図-6)。



図 - 6 只見川水系沼沢湖(火口湖)

これは 1060 年、平安時代になりますが、越後古図と言われている図面ですが、この辺に弥彦山があったりするので、沼垂がこんなところにあったりするので、これはかつての越後平野の状態がこうであったであろうという想定図なのですが、阿賀野川がこんなところに流れているのですが、これは今ではおそらく偽物だろうと、つまり想像して書いた図面だろうと言われていています。1000 年前の人たちが、昔はこうであったろうというふうに描いたのではないかと、あるいはもっと新しい地名が使われているところを見ると、1060 年と書いてあるけれども、もっと新しい時代の人々が描いたのではないかと、とも言われているのです（図 - 7）。

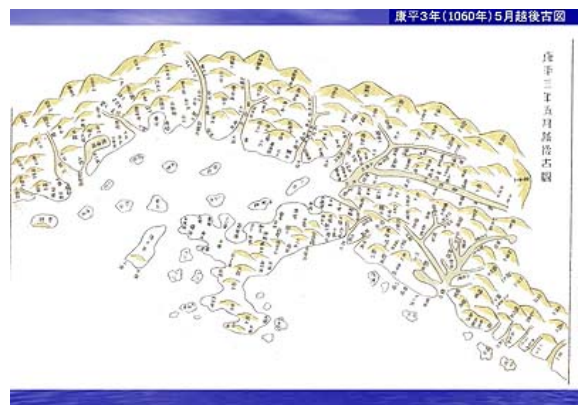


図 - 7 康平図（1060 年）

これは 1089 年に描かれた越後絵図ですが、これも似たようなことが描かれていまして、新津があったり長岡があったりするので、特徴はどちらも蒲原平野全体が入江になっていたということ、それから、ここに弥彦山、それから沼垂とか榎島とか五十嵐とか、こういった島があるので、こういう島が描かれているのは、前の図と似ているのですが、おそらくこれを描いた当時の人たちが弥彦山に登って見ていると、洪水の時は全体が入江のように見える状況もあったのではないかと、そういう人たちが想像をたくましくすれば、昔はおそらく入江だったのだろうと想像するに足るような状況が山の上から見たのではないかと、それで、こういう絵を描かれたのではないかと、思っております（図 - 8）。

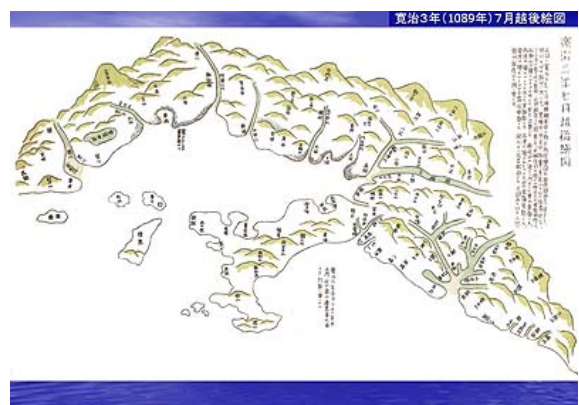


図 - 8 寛治図（1089 年）

（鈴木）

よく地図にない海とか湖とかいう表現をします。司馬遼太郎の「街道をいく」にも出てきますけれども。

（長谷川）

鳥屋野潟はそういう地図にない水面と言われますが、洪水の時は完全に湖になってしまうのですけれども、乾いている時はちょっと陸が見えるというのが、つい最近まであったわけです。ですから、江戸時代、あるいはもっと古い時代に見れば、出水期には、平野全体が水面に見えるという状況があったのではないかと思います。

（鈴木）

地図にない湖を地図にしたわけですね。

（長谷川）

おもしろいことに、弥彦山のところに半島が出ているのです。この半島を探すのだけれども、海の中には全然その痕跡もないそうです。

これ（図 - 9 左）は、新潟で最初の町建と言われ、1617 年、これは江戸時代、徳川の時代ですが、長岡藩主堀直寄による最初の町建でございまして、ここに本町とか片原通とか、古町通という名前が使われていまして、ここに船着き場があって、ここにまちができるという町建を最初にやった。これが 1617 年の最初の町建なのです。この当時は江戸時

代ですから、幕藩体制ですから信濃川の左岸側は長岡藩でございました。右岸側は沼垂から新津まで新発田の溝口藩でございまして、海から来た荷物が岸に着きますと税金が入りますから、どちら側の港に船を着けるか取り合いになるくらい、溝口藩と長岡藩が争ったという訴訟が随分起こっています。長岡藩には松平さんがいて、牧野さんがいたわけですがけれども、これは徳川の親藩です。それに対して溝口藩の方は親藩でなかったわけですから、いつも訴訟のたびに長岡藩は有利な判定を受けるという歴史を繰り返して、とにかく仲が悪かったのです。

この新潟の地が港であったという歴史は、西暦 927 年の延喜式という式目、当時の法律とか定めを書いた延喜式というものにはっきり出ておりまして、蒲原の津というのがここにありまして、それは公の港、国の港として蒲原の津を置くと、その蒲原の津から日本海を渡って敦賀の港へ入って、敦賀から琵琶湖に入って大津に行き、そこから京都へ行くという 927 年の延喜式という式目がございます。それによりますと、蒲原の津から京都に行くのに 36 日かかると、陸で行くと 34 日かかると、いくらも変わらないのです。つまり重たいものはほとんど船で運ぶということは、船が非常に重要な交通手段であったということが分かります。ということは新潟の港、つまり蒲原の津というのは、この地域全体にとっての大きな交通の拠点として機能していた、国の港として既に認定されて、蒲原の津の整備が行われたということが分かります。やはり車のない時代ですから、川の流れを使って重たいものを上流から運ぶという流域の経済圏の広がりというのは、大変大きなものだったのではないかと思います。船による舟運というものが非常に活発に行われ、しかも主として行われたということが分かります。しかも運賃も、陸で運ぶのと船で運ぶのとでは、船の方が 5 分の 1 という安い費用で運ばれていたのです。そんなこともありまして、新潟の港としての機能は、南北朝の争いの時にもどちらかが港を制するかというのが大変大きな課題だったようです。

堀直寄がやるわけですがけれども、その当時はまだ川を治めるという技術は非常に貧弱でございましたから、ここに白山島、寄居島という中州ができてしまう。ここに白山神社があるのです。こういった状態ですから、出水の度に川の流れが変わるようなことがあり、川岸が土砂で埋まってしまふのです。船が着きにくくなる、そんなこともありまして、1655 年に明暦の町建というのを行いまして、白山島、寄居島のところにまちを張り出して造ったのです（図 - 9 右）。そして、その時に堀割を造りました。1655 年の町建の時に初めてこういう堀割ができた。水を防ぐという意味もあったと思いますけれども、同時に沖どりの船からはしけでもって荷物をまちの中に運び込む、そういう役割をした、そういう堀割のまちづくりが 1655 年にできております。その時に古新潟町と書いてありますが、かつての新潟です。古い本町に住んでいた人は、何月何日までに新しい本町に移りなさいとか、古い片原通にいた人は何月何日までに片原通に行きなさいというような強制的な疎開をやっております。大変なことだったと思います。現在の荻野通の海側の方に、古い新潟のまちがあったということになります。現在もこの 1655 年の当時に作られた町建通りのまちの名前が残されている。ですから、新潟の現在の中心部の町建というのは、約 350 年前に作られたということがこれで分かるかと思います。この当時はまだ阿賀野川が信濃川と河口が一緒になって出てきています。阿賀野川が山の下のところ、今の通船川のところ



図 - 9 元和 3 年 (1617) 当時の新潟の町建

から入り込んでいるわけです。この 1655 年当時はそうだったわけですが、1731 年に阿賀野川がまっすぐ松ヶ崎浜に分流してしまうという事件が起こります。

これ（図 - 10）が分流した後の図面を示していますが、赤いところが第 1 砂丘列で一番古い砂丘列です。オレンジ色が第 2 砂丘列と言われているところです。鳥屋野潟があります、山二ツとか石山がこの辺にあるわけです。黄色が第 3 砂丘列とって、古町とかがこの辺にあるわけでございます。山の下があったという最前列の砂丘列でございます。縄文土器が出たのは、この阿賀野川の第 1 砂丘列のところであったわけです。

（鈴木）

砂丘があるということは、そこがその時代の海岸線と考えればいいわけですか。

（長谷川）

そういうことです。かつてはずっと入江だったのが、12000 年前の氷河期の終了とともに温暖化が進んで、雨がたくさん降るようになって土砂がだんだん出てくるのだけれども、冬季風浪でもって押し戻されて砂丘を形成する、そういうのを繰り返してきたことになるわけです。

（鈴木）

少しずつ海岸線がせり出していくと。

（長谷川）

信濃川、阿賀野川から流出する土砂によって越後平野が作られてきているということが、これで分かるかと思えます。まさにそういう意味では、母なる川・信濃川がこの大地を作ったということになります。そこに居住する環境として開発して来るといって、私どもの先輩たちの努力がこれから始まるわけです。5000 年前の縄文土器のところには、集落の形跡がないのです。つまり、どこかから持ってきて、前線基地としてここに漁労などを営んでいたのではないかと、今の学説ではそういう状態なのです。

これは 1731 年、先ほど申し上げましたように、砂丘と砂丘の間でだんだん干拓などをしながら耕作が進んでくるわけですが、江戸時代に随分干拓をするのですが、悪水がたまる。つまり洪水の時にありますと、信濃川も阿賀野川も本川の水位が上がりますから、本川の水位が上がると、こういった砂丘の間の湿地帯に逆流してしまうわけです。逆流するということは、そこで稲がとれないということになります。従って、早く海に水を抜きたいという運動がこれらの集落で起こります。この松ヶ崎浜村の人たちが新発田の溝口藩に、この阿賀野川の水を抜いてくれと言ったのですが、新潟側の方の長岡藩は断固反対で、ここで水を抜かれてしまえば船も入れなくなる、浅くなるということで断固反対、そんなことでずっと長い間争いを繰り返しているのですが、最後にとうとう、せめて洪水時の上水だけでも流してほしいということで、幕府がそういう採択を出しまして砂丘の一部、山の上の方だけ切って、洪水で水位が上がった時に上水だけを流してもいいという裁定をして、長岡藩もそれならしょうがないということでやるわけですが、1 年で大水の時に全部砂丘が持って行かれてしまうのです。それで、この大河が真っ直ぐ伸びたと、これだけの大河ですから、当時それを元に戻すだけの技術力がなかったわけです。現在もそういう状態が続いて、心配したとおり通船川には水が流れなくなると、信濃川はどんどん浅くなるというような歴史を持っているわけです。

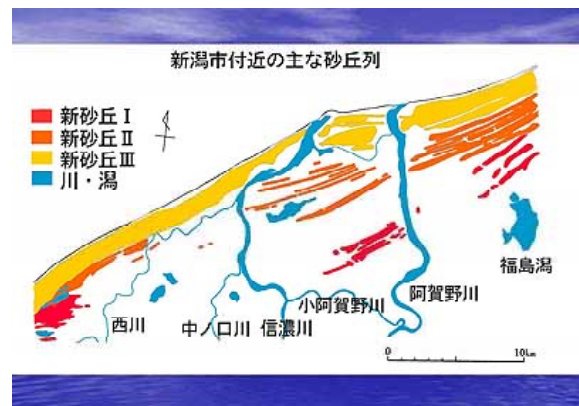


図 - 10 新潟市付近の主な砂丘列

この信濃川も洪水に大変悩まされるわけですが、特に明治 29 年には横田切れという大災害が起こります。江戸時代からこの大河津の部分から寺泊へ水を抜いたらどうだということで民間からの提案もあつたりしているのですが、巨大な費用がかかりますので、幕府としても決断ができなかった。とうとう明治政府に持ち越されます。明治の初めにこれを一生懸命抜いた人がおられるわけですが、阿賀野川の本流が向こうへ行ってしまって、信濃川の河口が浅くなったという歴史的な事実もありますので、掘削したのを取りやめさせてしまうわけです。

(鈴木)

港がますます浅くなるということですね。

(長谷川)

新潟の港町の人たちは、全部反対するわけです。そんなことで明治まで来たのですが、明治 29 年に横田切れという大災害が起こりまして、越後平野全体が何箇月も水に浸かってしまう。子どもを売らなければならない悲惨な状況がここに続くわけです。それで明治政府もついに決断いたしまして、明治 42 年にここに着工するわけです。東洋一の大規模事業と言われている大河津分水が、明治 42 年に着工されるわけです。

ご覧のように(図 - 11)信濃川というのは、本当に幅の広い川が流れてきているわけですが、大河津分水で新潟側に流れているのは実は右端の細い水路部分のこれだけなのです。新潟側の洗堰というのは、ここから水を取るだけなのです。洪水の時は全部水が寺泊の方に流れるという計画にしているわけです。そのおかげで、この新潟側の平野が守られています。しかも港の水位、あるいは水の流れが安定するわけです。洪水の時に水が流れていけば、船も流されてしまいます。水流が早ければ船も流されて



図 - 11 大河津分水

しまいますけれども、ここでもって制御することができるようになった。そのために安定して港が使えることになるわけです。そういう計画だったわけです。この大工事をやりまして、100 人犠牲が出ております。新潟から行った人もここで亡くなっているわけですが、そういう尊い犠牲のおかげで大河津分水が通水します。大変時間がかかりますけれども、大正 11 年に寺泊に通水するわけです。その後、信濃川本川では破堤というような洪水被害はないのです。これは本当にそういう意味で大正 11 年に通水して以来、本川の破堤というような洪水がないということは、この越後平野全体の安全のために大変大きな役割を果たしてくれている大河津分水であり、現在の我々も感謝してもしきれないほどの大事業をやっていただいたなど、20 世紀新潟地域における最大の事業、日本国政府にとっても大事業でございます。東洋一の大規模公共事業だったわけでございます。しかし、ご覧のように寺泊へ行く分水路は太いのですが、河口の方で川幅が細くなったりしてしまっていて、あの当時の計画、あるいは技術力でしたから、こうせざるを得なかったわけですが、これが狭すぎて、もっとしっかり海に流すようにしていただかないと、この下流の安全、特に洗堰下流右岸堤防の安全に問題があるのではないかとということで、大河津分水路の改修期成同盟というものを作りまして運動をしているのです。新潟市長が会長なのですが、せめてこの新潟側への洗堰だけでも造り直していただくということで造り直していただきまして、洗堰は安全になったのです。取りあえずは下流域は安全なのですが、この分水路の堤防が弱い。最近のニュースで、可動堰の改修工事に着手したと新聞に出ていましたので、新可動堰を造っていただき、洪水を制御するといいますが、

普段は制御するわけですがけれども、洪水の時には流水するという可動堰を新しく造る工事が始まるようでございます。越後平野全体の安全のためにいいことだと。下流だけではないのです。水位があがると上流の長岡までを含めての洪水になるのです。ですから、長岡市も含めて越後平野全体で、安全のための改修が非常に待たれている事業になっているわけです。

ハードな事業という意味で最大の事業は大河津分水と申し上げたのですが、大正 11 年に通水するわけですがけれども、その前に、間もなく大河津分水ができると信濃川の水位が安定すると、洪水が下流に及びませんから、新潟の港の安全が保たれるようになるという意味で、港を改修しようということなのですが、その前に何と言っても長岡藩と溝口藩は、長いこと喧嘩をして仲が悪かったけれども、この際、合併していい港を造ろうという気運が盛り上がります。明治 42 年に大河津分水に着工いたしますけれども、



図 - 12 新潟港竣工図（大正 15 年）

大正 3 年に新潟市と沼垂町が合併するのは。旧藩の対立を越えて合併するのは。すごいことをやったなと私は感心しているのですがけれども、もちろん反対はあるのですが、反対を押しきって新潟市と沼垂町が合併いたしまして、沼垂に新しい港を造るということをしたのです。これが大正 15 年に出来上がった新潟港竣工図、新しい近代的港湾を造ったのです。この図を見ますと萬代橋は今の流作場五差路のところまで続いていたわけです。そして、鉄道の沼垂駅の所に港を造りました。これが現在の中央ふ頭です。つまり大正 3 年に合併して、沼垂に港を造ろうとやってやった工事が大正 15 年に完成します。それが現在も使われている港湾です。つまり近代港湾・新潟という事業を大正 3 年の合併によって、ここを中心にして事業をやるということが行われたわけです。これは私はそういう意味で、大正 3 年の新潟市と沼垂町の合併というのは、ソフトという意味での 20 世紀最大の事業だったなと、あの合併によって現在の湊まち・新潟の発展があるのだということをつくづく感じております。

大河津分水ができたことによって洪水がこないということで、信濃川の川幅が狭くて済むようになるのです。それで、(図 - 12) 萬代橋上流右岸に水の勢いを弱める水制の工事が見えます。そうすると、だんだん砂がついてきています。この辺りは現在の萬代橋のたもとです。今は万代シティ等があり、市内でも有数の繁華街ですが、このころは川の中であつたわけです。

(鈴木)

その萬代橋は今の萬代橋ではないですね。

(長谷川)

これは 2 代目です。明治 19 年に最初の木造の萬代橋を民間で造るわけですがけれども、有料の橋だったのですが、船の方が安いということであまり渡らないので、すぐ寄付してしまうのですがけれども、明治 41 年の新潟の大火でもって焼けてしまって、明治 42 年か 43 年だったと思いますけれども、新しい萬代橋を造ります。これは 2 代目の木橋です。これは、さきほどの五差路まで延々と続いています。

(鈴木)

1,270 歩でしたか、高浜虚子の句碑がオークラホテルの前に建っていますよね。

(長谷川)

ここが流作場で、現在の万代シティになっているところです。新しい萬代橋は、このす

ぐ脇に昭和の初めにできるわけです。国の重要文化財になっていますけれども、現在の橋は3代目の橋です。大正15年にこういう港ができたということが、新潟市の発展の大きな礎となっていると思います。

これ(図-13)は、昭和6年の信濃川下流の状況です。右端が先ほど見た万代シティ周辺です。ここに、昭和の初めに架けられた昭和大橋があります。昭和大橋の上流右側に土地が随分ついているのが分かると思いますが、これは県庁のあるところです。網川原のあたりです。ここに白山神社脇市街地に隣接して特徴的に入江が入り込んでいます。これがいわゆる白山浦なのです。昭和の埋立になっています。

(鈴木)

長谷川さんが泳いだという。

(長谷川)

これは昭和6年ですから、私の時はちょうど埋立の真っ最中というところですよ。芸術文化会館はみんなこの白山浦にあって、川岸町ですか、昭和の埋立でまちができていたと言えらると思います。ここ(屈曲部の海側)に競馬場があったりします。堀割があったのです。その話を次にしたいと思います。

これ(図-14)は、鳥屋野潟周辺の葦沼の状況でありまして、私は昭和9年生まれですけども、子どもの頃でもまだ、稲刈りをするのに船でやったり、水車でもって水を吐くということでごさいました。腰まで浸かって田植えをする、腰まで浸かって稲刈りをするという状況の湿地帯でごさいました。鳥屋野潟というのは湖底の地権がございまして、あれは共有の地権がありまして、周辺の田んぼを耕していた人たちが、鳥屋野潟はマイナス2.5メートルと一番低いところですから、そこへ泥が流れてきます

が、その泥をさらって自分の田んぼに泥を入れると、少しでも他より土地が高くなっていればそれだけ稲の実りがいいと、つまり篤農家と言われる人は朝早く起きて、船で泥をさらって自分の田んぼに土を運ぶという大変な作業をしながら耕したのです。葦沼と言われた地域でもって水田耕作をしていた。これが私の子どもの頃ですから戦前です。昭和20年くらいまではこういう状態が、鳥屋野潟の方ではずっと続いていました。昭和橋を渡ると全部田んぼでしたから、私より先輩の方が今日も何人かいらっしゃいますけれども、もっと鮮明に覚えていらっしゃる方々が多いと思いますが、そういう苦勞をして、あの地域を耕していたわけです。

新潟はそういった水との闘いがありましたが、他にも随分災害がたくさんありました。少し列挙してみました。まず一つは、(図-15)海岸線の後退であります。写真左上がかつての海岸線なのですが、その左側が現在の海岸線です。場所によって250メートルから300メートル侵食されているという状況がこれでお分かりだと思います。下の写真は侵食によりとうとう、測候所が埋没してしまった状況です。私が子どもの頃でよく覚えていますが、昭和10年代はまだ左上の写真の位置、かなり陸地がありました。この測候所がだ

昭和6年信濃川下流状況



図-13 信濃川下流の状況(昭和6年)



図-14 湿地での水稲耕作

んだん傾いていって海に沈んでしまいます。そのために海岸線に護岸整備をやっていまして、離岸堤というものを造る、あるいは水の勢いを止めるために縦堤と言っていますけれども、縦に長いのを造って水の海流を抑える、ここに離岸堤というのを造って、波が直接渚線を侵食するのを防ぐという事業が行われているわけです。この技術を開発するにも随分時間がかかりましたし、現在でもテトラポットが少しずつ沈んでいくわけです。毎年嵩上げしながら海岸線を守ってくれているわけです。ご覧のように新潟の

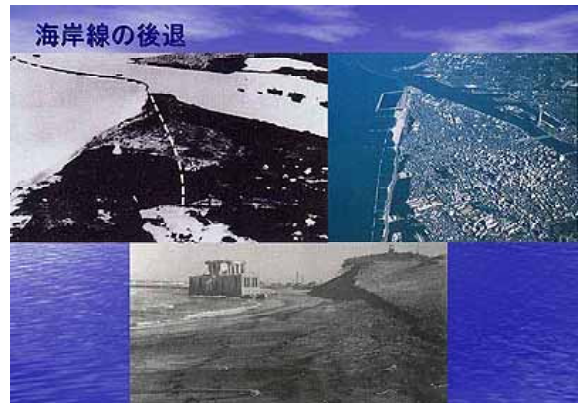


図 - 15 海岸線の後退

市街地のすぐ近くまで海岸侵食が進んできているということで、大変重要な離岸堤ということで直轄の事業、つまり国の直轄の事業でこの分をやっていただいているわけです。ここに囲みがありますのは、県の事業でやっている海岸の埋立、港の事業としてここに土地を造成して、港の機能をここに張り付けていこうということです。

ここに港のための防波堤が見えています。これは新潟の西港と言われているところです。新潟の西港というのは、信濃川の河口にある。ここにはこの万代島の内側に漁港があるわけですがけれども、ここは先ほどの大正15年に造った中央ふ頭があるわけです。合併後に造ったものが、現在も使われております。毎年毎年この港の部分には信濃川の土砂が流れてきますから、これを毎年土砂を掘削して航路を維持しなければならないという宿命を持った港になっているわけです。しかし、日本海側では最大の港でございまして、特定重要港湾として国際的な物流ができる港湾という指定を受けております。国際的な物流ということは、CIQという税関とか検疫、それから外国人が入ってきますから入国管理、そういった機能を持った港という意味なのです。それは新潟が国際港であるということなのです。しかもそれは全部国の仕事なのです。そういう国の三つの機関が新潟に立地しているということなのです。そういうことから、新潟空港も国際空港になっているわけです。そういった湊まち・新潟だったということが、新潟のまちづくりに大変影響を与えているということが、これ一つでも分かるかと思えます。そういう重要な港だけに、今度はロシアの総領事館が来る、韓国の総領事館が新潟に立地する。日本海側の他の都市にはこういった総領事館がありません。そういう役割の宿命を持った新潟だということが言えると思います。

昭和30年に新潟大火がありました(図-16)。小林デパート、万代デパートと言っていましたけれども、それが残っていますが、ほとんど古町が焼けてしまいました。こういう大火が新潟で頻発していました。特に明治41年には数千戸を焼く火災が年に2回もありました。これは北陸沿岸の都市に多く発生するフェーン現象が原因ですがけれども、何とか火災の発生が少ないまちにしようということで、鉄筋コンクリートの帯を榎谷小路沿いに造ってみたり、いろいろなことをやりましたけれども、何と言っても住民



図 - 16 新潟大火(昭和30年)による状況

が火を出さないのが一番ということで、今は合併してしまいましたけれども、私が市長時代に火災発生最少都市、つまり住民1人当たりの火災発生率が最も少ない都市に新潟はなったのです。消防や各町内会の方々に本当に頑張ってください、何年間か続きました。

過去には京都が一番火災の少ない都市でした。歴史的価値の高い建造物が街中にありますので、まちの家の造り自体も火災が発生しにくいように、火を使うところは全部土間になっている家が多いのです。それから富山、新潟と、この三都市がいつも1位を争っているのです。余談になりましたけれども、この大火で新潟の資産家の持っていた財産も、こういう大火を繰り返すたびに全部焼けてしまっているわけです。ですから、残念ながら新潟には古くからの蓄積と言われるようなものが残っていないのです。それと、お城がなかったということも、殿様が住んでいないわけですから、金沢や仙台のように、その都市を象徴するようなシンボル空間が新潟にはないということが、新潟にとっては少し寂しいです。逆に言えば、そういう市民の象徴になるような空間を、現代生きている我々がこれから作り出していかなければならない、そういうまちなのだということを感じます。

もう一つ、新潟に不幸が襲いました。それは地盤沈下です。幸か不幸か、天然ガスが地下から出るものですから、天然ガスを掘ってお風呂を焚いて、お風呂屋さんに行かなくてもいい家もかなりあったのですけれども、また同時に天然ガスを利用した化学産業なども発展いたしました。しかし、地下から掘るためにだんだん軟弱地盤、沈下をしています。これ(図 - 17)を見ていただきますと、これは港湾なのですが、右側のコンクリート擁壁の右下に地面があります。これだけ海水面と地面との間に差ができて



図 - 17 地盤沈下の被害(昭和34年)

しまった。従って、新潟は堤防によって守られているまちなのです。ですから堤防を造り、それを維持管理する費用というのも大変かかるまちなのですが、そういう宿命であるということを十分考えてまちづくりをしていかなければならない、そういう土地の固有の条件だということを考えないといけないと思います。

もう一つ、大災害がまいりました。昭和39年の新潟地震でございます。地震による倒壊、加えて津波がまいります。津波の高さ自体は大したことなかったようですけれども、力が強いのですから、こうやって流されてしまいました。石油タンクの炎上、周辺への火災の広がりというものも起こったわけです。昭和39年、覚えておられる方が多いと思いますけれども、新潟で国体が開かれた年でございます、しかもこれはオリンピックの年でございます、本来なら秋にやるべき国体を夏にやったわけでございます。



図 - 18 新潟地震(昭和39年)

天皇陛下もおいでいただいて、お帰りになった後、地震が起こってしまったと、これは順番が違ったら大変なことございましたけれども、国体も無事に終わって、天皇陛下も無事にお帰りになって、オリンピックも秋には無事東京で開かれたということになりました。忘れることのできない大災害ございました。

アパートが倒れたり、あるいはクイックサンド(流砂現象)という、要するに地面の下で地下水の高いところでは、地盤が液状化して重たいものが倒れてしまうということがこの段階で非常によく言われたのです。昔からあったのでしようけれども、学会で大変問題になって液状化対策、建物や土木公共物にも液状化対策というのが必要なのだと、何メートルか深いところまで杭を打たなければいけないということが分かってきたのです。タン

クの炎上もそうでした。タンクが揺れることによって出火するわけですが、現在のタンクはそういったことにも対応できるように改善されているわけです。そういう意味で、新潟地震は災害の先進的な事例を残すことになったわけでございます。ですから、新潟はこの後の復興に関しては、液状化対策をした公共施設の整備が非常に進んでいったと考えていいと思います（図 - 18）。

平成 10 年に、私はちょうど市長をやっておりまして、それまでは新潟で降った雨の最大雨量というのは、時間雨量 53 ミリという雨量だったのです。大変な大雨です。気象庁が時間雨量 20 ミリを表現する時に「非常に激しい雨」という言い方をします。ところが、平成 10 年の 8.4 水害というのは、過去の大雨記録を倍上回る、時間雨量 97 ミリという信じられないような大雨が、しかも朝方に降ったのです。そのためにあちこちで浸水被害を起こしました。これ（図 - 19）は、大堀幹線の状況ですが、腰の辺りまで



図 - 19 8.4 豪雨水害（平成 10 年）

水がきて、自動車が使えなくなりました。この時も被害状況が分布を見ますと、先ほど砂丘列の図面をお見せしましたが、砂丘と砂丘の間に非常に浸水被害が起こった。床上浸水というのは、そういうところに起こっているわけです。

これは信濃川や西川の堤防が切れたわけでもありません。これはまちの中に降った雨が吐けきれなくなったのです。これを内水被害と呼んでいます。破堤などにより川からの水で被害が出てくるのは外水被害と呼ばれています。川の堤防で守られている市街地側を堤防の内側といいます。降った雨が溜まって、下水などがはけ切れなくて詰まってしまうということなのです。100 年から 150 年に 1 回というような大雨だと思えますけれども、そういう被害を被ってしまった。こういった対策のために下水道、道路の下に川を造るような、人が歩けるほどの大口径の下水管を入れたり、それを川へ戻すための排水ポンプを造ったり、あるいは後で図面をお見せしますが、それぞれのお宅でも水を流さないで一時的にためたり、雨水を浸透させるというような施策の展開をしているわけです。

これ（図 - 20）は、大河津分水上流右岸で破堤した場合の最大の浸水深図です。この時の雨は 150 年に 1 回の確率で降る雨を想定しています。川に流れる水の量は $11,000\text{m}^3/\text{s}$ 、およそ 3 分でビッグスワンをいっぱいする量です。ちなみに正確な記録が残っている過去の最大流量は、昭和 58 年の約 $9,600\text{m}^3/\text{s}$ です。この雨により、赤いところは 3メートル以上の深さの水がたまってしまうだろうという想定をしたと、被害総額は 3.4 兆円になりますよという想定をしているわけです。ですから、大河津分水というのはいかに大切であるかということが分かるかと思えます。幸い新潟側への洗堰というのは造り替えていただきましたので、本当によかったと思いますが、今は丈夫なものになっています。昭和 57 年の洪水では旧洗堰の右岸側で漏水があり、危ない状態だったのです。それを直していただいたわけです。

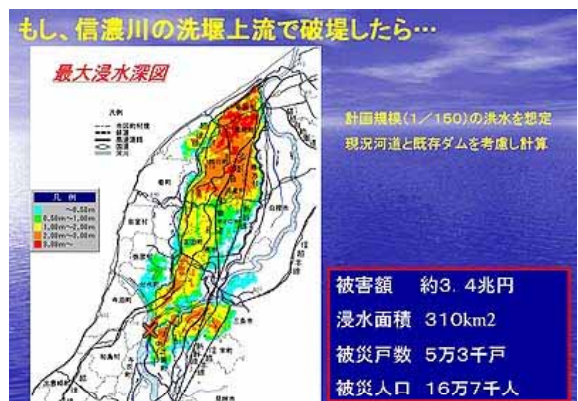


図 - 20 最大浸水深図

次に関屋分水、ご承知のように、県の事業で始めた関屋分水路が 47 年に完成しています。途中、新潟地震があったりしたために、国にお願いして最後は国にやっていただいたわけですが、その関屋分水がなかったとしたら、一昨年の 7.13 水害でどこまでいっただろうかということを表した被害図（図 - 21）でございまして、新潟の中心部が 2メートルから 5メートルの水深になるというようなところがございます。これも 2メートルですから、本当に大変な被害が出てくるだろうということが想定されているわけございまして、関屋分水工事のおかげで、私どものまちの安全が保たれているということをよく皆さんに再認識していただきたいと思っております。



図 - 21 7.13 水害における関屋分水の効果

もう一つ付言しますと、画面左下に鳥屋野潟がございまして、鳥屋野潟にマイナス 2.5メートル、一番低いところですから、ここに水が全部集まってくるわけですが、その鳥屋野潟の水を信濃川に抜くというポンプ場の工事を平成 10 年の水害の後にしてもらったわけですが、今完成いたしました。鳥屋野潟周辺の地域もそういう意味では安全性が増したと言えらると思っております。

私はちょうどこの辺の学校町に住んでいたと申し上げましたけれども、上の写真（図 - 22）がかつての信濃川で、写真左下、競馬場がありました。下の写真が現在の状況でございまして、信濃川をまっすぐ抜いて関屋分水路を造って、ここに洪水の時には水を流すと。普段はこの堰を閉めておりますが、洪水の時は水をこっちへ流すということで港が安全、また、まち全体が守られているということです。これをよく見ますと、ここ（写真の競馬場右上側）に小さな水面が見えておりますが、これは関屋堀割と言われた堀割でございまして、昔、江戸時代の末期だと思っておりますけれども、坂井輪地区の農民が自力でこれを掘って、海へ早く水を抜いてこの地域の水田耕作を安全にしたいということで掘ったのですが、大事業だったと思うのですが、残念ながら 1 年で砂に埋まってしまうと、機能しなかったのです。私たちの先人たちはそういう大変な努力をしながら、水抜きの作業をやってきたのです。今回の関屋分水もちょうどこの地域を通して、ここに近代的な技術を駆使して関屋分水を造っていただいたわけですね。そのおかげで新潟は 16 年の 7.13 水害から守られたのだということも、また再認識する必要があるのではないかと思います。少し歴史的な話になって、個人的な思惑も入りましてけれども、新潟のまちづくりの歴史的なことをちょっと振り返ってみました。



図 - 22 関屋分水路の開削前後

（鈴木）

ありがとうございました。6000 年前の笹山前遺跡まで遡ってのお話で、途中の地図にも出てきましたけれども、昭和 6 年の地図ですか、潟だらけというか、陸地の面積と水面の面積のどっちが多いのか分からないほどの地図も見ました。時々昔の人の紀行文を読むのですが、新潟のまちへ南から来る人は信濃川を下ってきますし、松尾芭蕉もそうですけれども、北からの人も途中から船に乗って、葦沼の中を小さな船に乗って入ってくるわけですね。先ほども申し上げましたけれども、信濃川水系、阿賀野川水系の水の上に浮

かんだようなまち、そこにまちを作っていくということがどんなに大変だっただろうと。先ほど海岸決壊の話がありましたけれども、あれも信濃川の水との闘いのために大河津分水を造って、それによって排出される土砂が少なくなったということが大きな原因の一つでしょうし、どんなに工夫しても水との闘い、それから逆に水から得る恵みを生かしながら、それがなければ湊まちであり得なかったわけですから、利益を得ると裏腹の闘いの歴史があったというお話だったと思います。シンボルがないというお話をされましたけれども、そうなれば信濃川をシンボルにするしかないということで、長谷川さんが市長時代に取り組みされてきた、今なお進んでいるまちづくりということで、また引き続きお願いいたします。

(長谷川)

今のパワーポイントでご覧いただいたように、かつては入江だったのではないかとと言われるくらい、それからまた、水害がいったん起こりますと、この平野全体が水に浸かってしまう、言うなれば新しく合併した政令都市・新潟というのは、この地域全体が一つの運命共同体なのです。信濃川、阿賀野川が暴れますと、全体が水に浸かってしまう。そういう意味で、昔から蒲原平野の運命共同体としての地域性みたいなものは、共有していたのではないかと私は思うのです。しかも砂丘ですから草木も生えない。内側を守る、そしてそこに畑を耕すということで、だんだん人間が定着できるようになってくる。言うなれば、人工によって土地を居住できるように開拓してきた、そういう歴史をこの越後平野の人は持っているのではないかと思います。港一つにしても、水勢を抑えるというのは大変な大事業だったわけですが、皆さんの努力で一步步立派なものに造り替えてきているなと思います。中でも、大河津分水によるところは大きいと、それによって地域全体の安定がもたらされて、そこに富の蓄積がある。例えば農業生産物は何倍かになっているわけです。トラクターが田んぼの中に入るといえるのは、かつての水田では考えられないようなことが、今は乾田化によって行われるようになってきているわけですから、そういう意味でも平野の生産性が上がる、そして居住の安定性が増すという意味でも、大河津分水の事業というのは大変な事業だったと思います。

では、次に新潟のまちづくり、いよいよ現代版になってくるわけですが、川との結びつきで新潟のまちをどうやっていったらいいかということをお話したいと思えます。

これ(図-23)は、信濃川のやすらぎ堤の状況、木があまり大きくないところを見ると少し前の図面ですが、信濃川のリバーフロントにこれだけの人がたくさん出てきております。これは緩傾斜堤防という、緩やかな傾斜の堤防でできています。それは何かと言うと、5分の1堤防、5メートル行って1メートル上がる、車椅子でも動けるような緩やかな傾斜、全部芝生になっていますから、大変大きな緑の空間が川の堤防にできあがってきています。これは堤防を強化するために造った堤防なのです。というのは、信濃川を深く掘りまして、水がたくさん流れるようにする。しかも、その泥を積み上げて堤防を高くする。水の断面が大きくなって、加えて堤防が高くなるわけですから安全性が増すわけです。こういう治水事業を国の直轄事業でやってくれています。信濃川も日本最大の川ですから、当然国の直轄事業です。直轄事業で、これだけの立派な事業をやっている。しかもそこに緩傾斜堤防というのを取り入れていただいた。これ



図 - 23 やすらぎ堤

は、信濃川を深く掘りまして、水がたくさん流れるようにする。しかも、その泥を積み上げて堤防を高くする。水の断面が大きくなって、加えて堤防が高くなるわけですから安全性が増すわけです。こういう治水事業を国の直轄事業でやってくれています。信濃川も日本最大の川ですから、当然国の直轄事業です。直轄事業で、これだけの立派な事業をやっている。しかもそこに緩傾斜堤防というのを取り入れていただいた。これ

は日本で初めてなのです。緩傾斜堤防であるおかげで、人々はここに憩うことができる。憩いの空間としての緑のスペースがまちの真ん中にできたということになります。ですから、まちの真ん中にこういう緑の空間を造る治水事業を心がけていただいた大変大きな成果を挙げているわけです。しかも、まちの中心部ですから、本来であればヒートアイランド現象が出るようなところなのですけれども、大きな水面があるおかげで、温度を低下するにも効果を果たしているのではないかなと思います。

図に茶色で書いてありますが、堤防内側に土をさらに盛りまして、そこに桜とか柳の木を植えている。これは新潟市の公園事業でやっています。なぜこんなことをやっているかと言いますと、皆さん加治川堤防の決壊のお話をよく聞かれると思いますけれども、かつては堤防に木を植えたのです。ところが、堤防に木を植えますと根っこが下に入ります。そうすると、普段は何ともないのですけれども、洪水で水位が上がりますと、そこに水圧がかかります。その水圧により根の部分に浸水してまいりまして、堤防に水が入って堤防が弱くなって堤防が崩れるということなのです。ですから、加治川の桜はみんな切らざるを得なくなり、切っているわけです。ですから、新しくできた堤防にも木を植えていないわけです。そのかわり内側に土を盛って木を植えて、この根っこが堤防を傷めないようにするという国の方をお願いして、ここに公園造成をさせてもらったのです。ここに桜とか柳を植えて遊歩道にした。その中に新潟県の事業でサイクリングロードを造ってもらったということで、国、県、市が一体となって、信濃川の最下流の堤防を強化する。しかも、そこに都心に緑の空間を生み出すという事業と一緒にやらせていただいたわけです。それで今、市民の皆さんがたくさんここで憩うような状況を作っていただいているわけです。

(鈴 木)

私も新潟に来たのは 30 年前だったのですけれども、私は金沢の犀川とか浅野川を見ていたのですけれども、信濃川は矢板を打ち込んだような護岸で、これは川ではない、でっかいどぶみたいだなと思ったのが記憶に残っています。それから見たら、本当に変わりましたよね。

(長谷川)

変わりましたね。私は国家公務員をやっていた経験からいくと、昭和 30 年代というのは国全体が貧乏でしたから、機能を満たせば十分だと、ゆとりのある空間整備なんてとんでもないと、矢板を打って水が流れればいいじゃないかと、それを会計検査院に査定されて、贅沢なのは全部切られるという状況でしたから、国全体がそうだったのです。今ようやく少し良くなってまいりましたが、画面の断面図に堤防の下に粗朶沈床と書いてありますが、これは里山の木を組んだものです。粗朶沈床というのを護岸の一番下に入れておりまして、実は階段になっていまして、階段の下に入っているわけです。これで水勢を弱めるということと同時に、これはオランダの工法なのですが、新潟に取り入れられています。ここに木が組んであるわけですから、小魚がここに卵を産むのです。卵を産んで小魚が育つ。つまり魚がここで育つのも大変いい結果をもたらしているのです。まさに自然に優しい工法を取り入れていただいていると思っています。一番進んでいる工法と言ってもいいのではないのでしょうか。新潟の信濃川の両側にこれをやっていただいているわけです。



図 - 24 やすらぎ堤の利用状況

やすらぎ堤（図 - 24）は、ご覧のように大変よく利用されております。こういったところに人が憩っている時に若い人たちも朝の散歩、昼に子どもたちが課外授業や部活動などで、このやすらぎ堤を利用していますし、それから南高校でしょうか、ボート部がボートを漕いでいるという姿を眺めながら散策できるというのは素晴らしいと思っています。季節の花々も、これは白山小学校の生徒が植えたチューリップです。住民参加でこういう素晴らしい空間を作り出していると思います。

これは朱鷺メッセのシンボリックなタワーができています。萬代橋が国の重要文化財に指定されるというように、新潟を代表する空間になってきていると思います。

市民芸術文化会館（図 - 25）、素晴らしいものを造らせていただきましたけれども、対岸から見るとボートを漕いでいる風景、桜の木が随分大きくなりました。市民芸術文化会館を少し自慢させていただきたいと思いますが、芸術文化会館ができたのは平成 10 年です。

その前はどのような状態だったかと言うと（図 - 26）、昭和大橋がありまして公会堂、ここに音楽文化会館が既にできていました。ここに明鏡高校がありました。写真にあるテニスコートは、12 面ありますが、観覧席がないので大会が開けなかったのです。こういった施設で土地利用されていたものを全部移転するという大事業をやったわけです。既成市街地の中でもものを造るというのは、既存の機能をどこかに代替施設を造らなければならないという大事業を伴うのです。ですから、相当周到な準備をいたしました。議会にも特別委員会を作っていただいて、何年も議論していただいております。私が助役の時代からですから、十何年という時間をかけてやっているわけです。

写真右下にある白山公園は、明治 6 年に日本で最初に指定された都市公園です。由緒ある公園です。少し規模が小さく、1.8 ヘクタールくらいしかないのです。これは古町にまっすぐつながっているという都心の公園です。この一帯全体を新潟のセントラルパークとして整備しようという構想が持ち上がったわけです。そのための準備をいろいろしたわけです。積立もいたしました。10 年間で 100 億円くらい貯めています。そういった準備をしながら、いろいろ取りかかっていったわけです。

そして、これ（図 - 27）が完成後でございます。これが白山公園でございますが、ここに市民芸術文化会館、海外も含めて公開コンペで大変多くの応募作があったのですが、長谷川逸子さんという一流の女流建築家の案が当選したわけでありまして、その方に周辺も含めていろいろなアイデアをいただきながら整備を進めていったのです。これは県民会館です。県民会館も活用して、県民会館とも連



図 - 25 市民芸術文化会館



図 - 26 セントラルパーク整備前



図 - 27 セントラルパーク整備後

携するようにしました。一番の特徴はバリアフリーにしたことです。古町から入ってきて、車が一切この中に入らない。NHKの方に行く道路は半地下にして、その上に丘を造って、桜の丘にしたのです。地上レベルの駐車場が広場の下にあるのです。その上を緑地帯にして、イベントが開催できるようにしている。人はこういうスパゲティみたいな通路ですけども、ここを歩く。そうすると、ここにケヤキがたくさん植えられていまして、今はケヤキの木も大きくなりましたので、ちょうどケヤキの梢に触らんばかりにしながら通路を歩くことができます。ですから、幼稚園の遠足などでも本当に安全なのです。信濃川のやすらぎ堤から白山公園まで一帯を車と出会うことなく、安全に楽しむことができるようになりました。この市民芸術文化会館というのは、私に言わせればお城を造るような気持ちで造っているわけですけども、歌舞伎のできる花道のあるような劇場、講演会ももちろんできます。それからコンサートホール、これは東京のサントリーホールと同じような大変音響のいいコンサートホールになっていますし、能楽堂を加えています。新潟は能が全国的に見ても大変盛んなところですが、しかしながら、新潟市内には本格的な能楽堂がなかった。佐渡にはたくさんあるのですけれども、そんなわけで能楽堂を造らせてもらったと、それ全部を一つの中に入れたと、新しいいろいろな技術も工夫して中に取り入れていただきながら設計していただいた。実は私の大きな自慢の一つを申し上げますと、ここに信濃川のやすらぎ堤と市民芸術文化会館をつなげる緑の屋根だけ見えていますけれども、広場ができています。この下は駐車場になっています。ここで川沿いの道路を立体化しているわけです。つまり芸術文化会館を出てきた人が、そのまま車にあうことなく信濃川のやすらぎ堤に行けるということになるわけです。つまり、信濃川とこの地域と一体化をしたということ、直轄の堤防に穴を開けて基礎を打ち込んで、こういうテラスを造ったと、これもおそらく全国初めてのことだと思いますが、そういうご協力をいただいて、この地域全体のバリアフリーができあがっているわけです。そういう意味で、川面とこういったセントラルパークが一体化した場所になったと思っています。ちょっと自慢ですけども。



図 - 28 新潟市民芸術文化会館
(りゅーとぴあ)

夜景なども入れさせていただきました。この陸上競技場は、新潟国体をやった時の陸上競技場です。天皇陛下がお見えになったところです。これは都心の集まりの場所として大変貴重でございますし、災害があった時にはヘリコプターも降ります。いろいろなことで使えますので、これは残すべきだと思っていますが、体育館は大変古くなりましたので、いずれ建て直さなければなりません。この時、全体を含めたセントラルパークとしての構想をこれから整備していかなければならない部分があるわけです。サブグラウンドの活用、体育館の活用、将来は県民会館をどういうふうに使っていくか、これは新潟地震の記念の建築物でございます。体育館は新潟地震の前からあって大変老朽化しています。そういうことは現代の我々、次の世代がもしもかもしれませんが、これから考えていかなければならない課題だと思っています。

植えた桜はこんなに小さかったのですけれども、今は大きな木になっておりまして、もう建物が見えないくらい大きくなっております。桜の名所になっていますから、来年の桜はこの辺に寄っていただくと大変いいと思います。

右下は夜景です。さきほどの長谷川逸子さんのご提案で、こういう水面をたくさん造ってもらっているのです。この中にも水面が造られたりしていますから、この中にも水の流

れがあったりするのです。きめ細かい工夫をしていただいていますから、この夜景も楽しめる。これは芸術文化会館で催し物があつた時に、その後、アフターシアターというのでしょうか、劇場を見た後、そぞろ歩きをしながら古町に流れていくという動線が大変楽しい空間になっていると思います。

屋上は上がれるようになっていまして、周りをぐるっと回れるのです。回ると弥彦とか角田とかの山が見えるのです。真ん中にちょっとした食堂がありまして、散歩道の団子屋みたいなものですが、ここで軽食をとって散歩をすることができるという形になっています(図 - 28)。

これ(図 - 29)は、ホールの中身でございます。能楽堂、檜の香りがいたします。この右上の劇場が花道のある、歌舞伎ができます。左上はコンサートホール、これらの施設は国際的なエンターティナーといいますが、これは新潟が国際的に文化を発信する場として、これからも市民の方々からどんどん活用してほしいという気持ちで大変“質”のいいものを提供していると思います。2階(写真右下)にレストランがありますが、ここから信濃川を眺めながら食事することができます。



図 - 29 新潟市民芸術文化会館(内部)

テニスコートがあつたと言いましたが、大形の方に新しいテニスコートを造りまして、観覧席があり、全国大会が開催できます(図 - 30)。



図 - 30 新潟市庭球場
(テニスガーデンにいがた)

もう一つ信濃川沿いに、これ(図 - 31)は、昔、明治の初めに五港開港で新潟が開港した時の税関です。重要文化財です。新潟にしか残っていません。その周りに歴史博物館、ここに第四銀行住吉町支店という建物、昭和の初めですが、これを移築したと。鉄筋コンクリートの完全移築はこれが初めてではないかと思えますけれども、大変立派に移築することができました。現在できあがって、夜はこのようにライトアップされています。これは「郷土の歴史を知ることが、郷土を愛することにつながる」というテーマの下に造られていまして、水との闘いの展示があります。私が今日、お話ししている話の内容も、ほとんどこの中でご覧になることができます。



図 - 31 新潟市郷土歴史博物館(完成予想図)

ここに（図 - 32）旧税関がありますが、この周りはこういうふうに民地として使われていたわけです。これを皆さんにご協力いただいて、全部整理させていただいて、ここに新しい歴史博物館を造ったわけです。今、県の事業で河岸に遊歩道を作る工事をしていますので、周辺がまたよくなると思います。

このような配置（図 - 33）になっています。これが五港時代の税関、ここに第四銀行住吉町支店の移築、信濃川、ちょうどこの向いに佐渡汽船の船着き場がありますが、船が船首をめぐるような風景が見られます。湊まちに来ているのだということが分かる、そういう意味でも、いい場所にすることができたと思っています。

これが柳都大橋です（図 - 34）。これも直轄の事業でやっていただいた大事業でございました。市民にアンケートを取りながら、流線形のデザインを決めていただきました。歩くと分かりますと思いますが、バルコニーが途中にあります。そのバルコニーを是非造ってほしいと、できれば、このバルコニーから水面を見たときに魚影が見えるようにしたいなど、それくらい川の水がきれいになるといいなど。実はここはアユがのぼっているわけです。サケもたくさん上っているのです。ですから、そういう姿が見えたら素晴らしいと思うのです。仙台の広瀬川に行かれたことがある方は分かるかも知れませんが、アユが上っています。新潟の信濃川もせっかく上っているのですから、魚影が見えるようになったらいいと思っています。

これ（図 - 35）は、日本を代表する建築家の槇文彦先生の造られた朱鷺メッセのタワーです。この隣に国際会議場があります。最近では新潟アルビレックスBBのバスケットの試合もここでやるようになりましたけれども、新潟で一番動員できる集会施設になっています。すばらしいものを造っていただいたと思います。これも新潟の信濃川の景観をすばらしいものにする大きな要素になっています。

この部分は港なのですが、陸揚げ場なのですが、県の事業で港に沿ってデッキを造って、人が憩うような場所を造っていただいているわけです。湊まち新潟が港に近いところに人々が憩える、そういう場所を今造っているわけです。



図 - 32 歴史博物館整備の様子



図 - 33 歴史博物館周辺の整備図



図 - 34 柳都大橋



図 - 35 朱鷺メッセ

これが国際会議場です。この辺に蒲原の津があったのではないかという小林先生の説が最近出てきています。残念ながらこの工事をやったときには形跡がなかったのですが、この辺にあったのではないかとされています。

先ほど内水被害のお話を申し上げましたが、降った雨が全部下水道に流れ出す。つまり道路の舗装が進む、家が建て込んでくると屋根に降った雨が全部下水道に流れます。そうすると、舗装した面から下水道に入ってしまうと、下水道の管が容量を超えてしまいます。しかも下水道から流れてきても、それを川に流し入れるポンプの排水能力も超える。そうすると、内水の被害が出てしまう。それで、できるだけ屋根から降ってきた水はいったん自分の庭の中に浸透させて余った水、浸透しきれない雨水を下水道



図 - 36 内水対策・雨水浸透ます

に流れるようにするという浸透マスという事業をやっています。これは新潟が全国に先駆けてやっているわけですが、1基約 20,000 円の費用を市が負担します。(ほぼ全額にあたります。) そういった形で市民の皆さんのご協力をいただいているわけです。それによって平成 10 年の 8.4 水害のような時間雨量 97 ミリというような大雨でも、床上浸水しないという対策に強化をしているわけです。まさにこういったことは、市民の協力がなければいけません。駐車場を造って全部舗装されていますと、今までは、そこに浸透していたものが、全部流れ出すようになってしまうわけです。自宅の駐車場は小さい面積でも、それが集まると大変な量になってしまうのです。ですから、降った雨はなるべくいったん浸透させてから余った水を流すというようにしますと、雨の対策は飛躍的に強化されるだろうと思います(図 - 36)。

(鈴木)

どうもありがとうございました。先ほどの歴史のところ、まとめて長谷川さんがおっしゃいました人工でなければ保たれなかつたまちというのですか、人工によって発展の基盤を作ってきたまち、信濃川の恵みを受けつつ、それとの闘いの歴史であった新潟のまちがようやく潤いというか、川の魅力を楽しむことができる時代になって来つつあるんだと、それはまた今回さらに幅広く、これも先ほど長谷川さんの話にありましたけれども、信濃川、阿賀野川水系の地域として運命共同体にあるエリアの 13 市町村が一緒になって新しいまちを作って田園型政令都市、これもまた新しいタイプのキャッチフレーズということですが、そういうまちをこれから作っていくための課題は何なのだろうか、その中で水都と言われる信濃川、それから信濃川水域の様々な潟、それから海辺、そういったものをどう生かしていくのか、どう生かしていったらいいと思っていられるのか、愛郷の立場からお話をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

(長谷川)

冒頭に土地の固有条件、社会的要請、そして技術的なことを申し上げましたけれども、現代の社会的要請と言え、やはり高齢化社会に対する対応が欠かせないことだと思います。潤いの空間というものを人々が求めるようになった。信濃川の川べりは、かつては材木問屋の筏のつなぎ場所だったわけです。船が着く場所だったわけです。今はそういう意味では、生産の場から潤いの場が変わる、そういう社会的な需要が非常にある。5 日制ということは昔は考えられなかった。ですから、土曜、日曜に子どもを連れて近くを散歩する。あるいは定年後も、昭和初めの平均寿命は 43 歳ですから、それが今では 80 歳近くまで伸びた。ですから 60 歳定年で、定年後 20 年もあるわけです。この間をいかに充実した

人生で生きるかということになれば、健康空間あるいは文化的な空間、そういったものへの憧れ、そういったものの必要性が、昔に比べてものすごく大きな量で拡大していると思わなければいけません。まちづくりというのは、そういう健康空間、文化空間に対する対応をいかにまちの中に造っていくかということが、非常に大きな課題だと思います。

それからもう一つは、自然との共生というテーマです。これだけ多くなってしまった私ども人間という動物が大自然の中の一つとして生きていくためには、自然との共生が非常に大事だと認識されるようになっていきます。まちの中にいかに緑を取り戻していけるか、緑の中で健康な空間を過ごすか、なるべく身近にそういう空間がほしいというのが現代の社会的要請だろうと思います。そういう意味で、少し努力した点を申し上げたいと思います。

これは湖の最適の例ですけれども、鳥屋野潟の南側にできたビッグスワン。これは県の事業でやっていただいたのですが、ちょうど 2002 年のワールドカップサッカー大会に合うように造っていただいたものすごい施設です。最初は陸上競技場を造るということでやったわけですが、ご承知のように鳥屋野潟の周りというのは県立の公園になっているわけです。新潟県で第 1 号の県立の公園なのですが、施設が何もなかったわけですが、そこにこういう陸上競技場を最初に造っていただいたのですが、ちょうどワールドカップが日本に誘致という全国運動につながりまして、これは誘致しようということで立候補いたしましたして、幸い新潟が開催 10 都市の一つに選ばれたわけです。それは何と云ってもビッグスワンというものが間に合うということです。しかも、ビッグスワンは計画段階だったものですから、ワールドカップサッカー大会が開催できるような仕様に造り替えることができたのです。屋根の架かった席が何分の一以上なければならないなどの F I F A の厳しい基準があったのですが、それを満足する形で造ることができた。鳥屋野潟の南側のかつての葦沼の水田地帯、土地改良区の皆さんのご協力をいただいて、広大な土地を公共で取得することができたこと、こういうことが非常によかったと思います。

これは対岸から見ると、ものすごいインパクトのある建造物になっています。またビッグスワンの中の方から見ますと、逆に今度は鳥屋野潟が自分の庭のように見えるわけです。今度ビッグスワンに行かれたら、是非、上から眺めを見ていただきたい。世界にこんな立派な競技場はないと思います。世界のどこに出しても恥ずかしくない競技場ができたと思います。県という、市よりも大きな財布で造っていただいているので、立派なものを造っていただいたなと思っています。



図 - 37 新潟スタジアム（ビッグスワン）

こういうふうにして湖の周りをなるべく公有化して、こういったゆとりのある施設で使うと、大事なことだと思います。これは鳥屋野潟の水面を非常に生かしているという意味で、私どもの財産になっていると思います（図 - 37）。

（鈴木）

日本で何箇所か会場がありましたけれども、これだけの水辺空間に隣接したスタジアムというのはここだけ。

（長谷川）

もちろん日本ではここだけ、世界で見てもこんなところはないと思います。これだけ大きな鳥屋野潟全体がビッグスワンに付随した公園のように見えますから、大変なことだと思います。

(鈴 木)

亡くなられた佐野籐三郎さんが高速道路のところで線を切って、そこよりも新潟市街地寄りには公共のためにみんなで土地を提供するのだということで、この基本計画の段階から協力いただいていたと私も記憶しています。

(長谷川)

長く亀田郷土地改良区の理事長をやられた佐野籐三郎さんは、司馬遼太郎さんの小説にも出てまいりますけれども、本当に男気の強い人で、長年、亀田郷の赤字の土地改良区を支えて黒字にしたわけですから、亀田郷の土地改良区の佐野籐三郎さんのご協力もあって、この地域全体を公的利用にしようということで、しかも土地の価格も全部統一価格なのです。すごい協力をいただきました。ですから、県もこれだけ大きな土地を買うことができたのです。

このテルサの土地もそうです。亀田郷の土地改良区から買わせていただいた。この土地はいろいろと、いわくや因縁がありますが、県庁にしようかという話があったのですが、県庁が向こうに行ってしまったものですから、どうするというので市が買い取って使わせてもらっているわけです。

これ(図 - 38)もその一環でございまして、今日の会場、テルサの隣に新しい市民病院を建設中でございます。バイパス、高速道路のインターチェンジのすぐ近くでございますから、政令都市・新潟になった場合の中心病院として高速交通体系に近接して大病院がある、しかも病気の人のにとっては、こういった水と潤いの眺めがあるということは、回復に大変効果的だろうということでやっております。間もなく完成いたします。



図 - 38 新・新潟市民病院

これ(図 - 39)は、逆に新潟の西側、向こうに見える山は角田山でございますが、角田山の麓にある佐潟(さかた)という湖ですが、ハクチョウが飛んでまいります。夏はオニバスも生えます。ラムサール条約というのをご存じかと思えますけれども、こういった渡り鳥がいろいろな国を渡りながら南北を往復しているのです。これはシベリアの北からやってまいります、南から来る鳥もいるわけですから、渡り鳥があちこちの国、あちこちの地域を渡ってまいります、留まろうとする環境が崩れますと鳥



図 - 39 佐潟

が渡れないわけです。各国が共同して渡り鳥の環境を守りましょうというラムサール条約というのがあるのです。新潟には日本で 10 番目に指定された佐潟がございまして、ここはハクチョウの飛来地です。当時、これが指定された時は、国内最大都市だったのです。大都市の中のラムサール条約指定湿地ということで、たちまち会長市にさせられましたけれども、そんなことで、この環境が保全できる対策が講じられているかどうかということが問題なのです。水質を守る、それから土地の周りが乱開発されないように土地を購入するとか、いろいろな条件を揃えてラムサール条約に指定された湿地帯になったわけです。こういった湿地をこれから増やしていかなければならないと思います。大事なことは、ハクチョウがここをねぐらにしています。ですから、雪が積もると下の水草の根っこを食べ

たりして暮らすわけですけれども、普段はどうしているかと言うと、ここから飛び立って、昼間は蒲原平野で米の落ち穂を食べているわけです。つまり政令指定都市の中で落ち穂を食べている。ですから、これが政令都市になった時に蒲原平野の土地利用をうまく誘導して、ハクチョウが暮らせるような環境を保全していかなければいけないわけです。そういうことがこれからの政令都市の大きな一つの課題だろうと思います。ハクチョウが来なくなったのでは、せっかくの雄大な自然と共生しているという魅力がなくなります。この湖の近くに行きますと、飛び立つ時の羽音、帰ってくる時の羽音が耳のそばで聞こえます。しかも家族で飛んだりしますから、野生の家族愛というのに接することができます。すばらしい景観が新潟に残っています。江戸時代からハクチョウは保護されていたのです。そういうことを是非これからも次の世代につなげていかなければならないと思います。

(鈴木)

今年がラムサール条約指定のちょうど 10 周年に当たるということで、12 月に記念のイベントが行われます。鳥屋野潟という従来から新潟市民の憩いの場があって、さらに佐潟が 10 年前にラムサール条約ということで、自然の宝庫として認定を受けました。さらに、今度は合併によって福島潟が半分くらい干拓されていますけれども、それも広大な新潟市の中にあつたと、その三つの潟を合わせて潟と都市との関係のあり方を考えようというイベントが 12 月に 10 周年を記念して行われるということで、楽しみにしている部分もあります。

(長谷川)

非常にいいことですね。野生の鳥がすむ環境が、少なくとも現状が守られる、これからどんどん改善されるという政策的な方策がとられるという段階でラムサール条約になりますから、鳥屋野潟は残念ながら水質がまだまだ不十分でございますから、こういったものの水質の改善を図って、公園の指定はしたけれども、まだ用地買収ができていないとか、いろいろなことがありますから、そういう準備をして是非、ラムサール条約に指定されるような水準にまで高めていったらいいと思います。

これ(図 - 40)は、海岸の方の話になりますが、これは新潟の西海岸です。海岸のすぐ後ろの松林の中です。松林の中にこういう遊歩道を造っておりまして、道路との交差のところはこういうふうに立体化して、この橋の上に土を盛って、土の道をずっと歩いてこういうようになっているのですけれども、「思索の道(しさくのみち)」という名前がつけていますけれども、ぼんやり歩いていても車にぶつからない道で、新潟島を一周できるというふうに造られているわけです。これは関屋分水路のところも、今行



図 - 40 思索の道

ってご覧になると緑になっています。かつては、ただのコンクリートの道だったのですが、今は全部芝生になっておりますし、灌木も植えていただいています。そういうところと海岸の松林の中の道がつながって、新潟島を一周できるような思索の道というのを造っているわけです。車が通らないのに橋を造るなんて何だと言われたことがありましたけれども、まさにこれは人専用の道路でございますして、運動部の学生さんたちが走ったりして体力強化しているようですけれども。

(鈴木)

最近は狸も多いようです。

(長谷川)

狸は人間の近くにすむのです。化かされないように。猿が出たこともありました。猿もいろいろなウィルスを持っていますから、危ないのです。

(鈴木)

でも、角田山系からそれだけ緑のベルトがつながってきたということなのでしょうね、松林まで来られるということは。

(長谷川)

そうですね。食料もあるということでしょうね。

これ(図-41)は、新潟駅の再開発です。新潟駅を立体化しようということで、在来線が新幹線並みの高さになるわけですが、これも公開コンペをいたしまして、こういう案が当選いたしました。当選案を見ますと、駅に緑の空間を造っています。これは都市計画決定が終わりまして現地事務所を作りましたので、これから現地で詳細説明、そして用地買収と入ってまいります。大変楽しみな事業です。今までは県の事業だったのですが、今度政令都市になると政令都市の事業、分担関係をどうするか議論の最中だと思いますけれども、いずれにしても県の協力をいただかないといけないと思います。

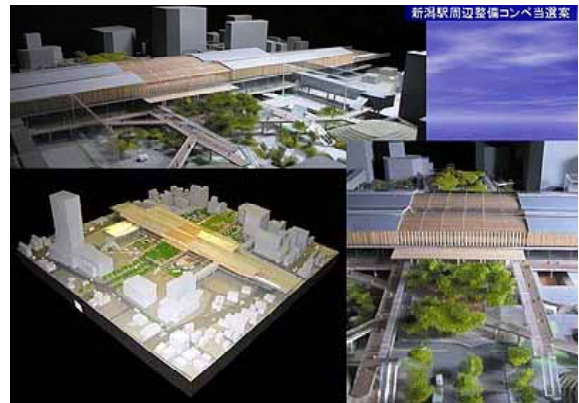


図 - 41 新潟駅周辺整備模型

これは鉄道のかつての貨物駅があった辺りです。こういったところは全部市が買収して、本来、県が買うべきではないかといういろいろあったのですが、とにかくこういう事業のためには準備をしなければいけないということで、市が買収して持っているわけです。

図-42は、「NPO法人堀割再生まちづくり新潟」が行なっている市民運動のイメージ図です。西堀とか東堀とか、1655年の明暦の町建をやった時のような堀割を復元すべきではないかという運動なのです。こういうふうに立派な絵を描いて、市民のイメージアップを図ろうとしているわけです。これにもいろいろ解決すべき課題はありますが、まちの中に堀があったわけですから、堀に対する愛着も非常にあるわけです。昭和39年の新潟国体のためにこういったものを埋めてしましまして、堀の中に管渠を入れて、上に蓋をして自動車道路になっているわけです。ですから、現代の自動車交通のためには大変有益な道路として機能しているわけです。1617年、1655年の明暦の町建のお話をちょっと申し上げましたけれども、あの堀割というのは港に入った船からはしけで荷物を運んでくる、要するに交通路としての役割が非常に大きかったわけです。その交通路としての役割が今は道路が代替しています。ですから、道路になっているというのは、言うなれば昔の堀割の役割をしているわけですが、西堀、東堀は全部一方通行です。そういったところを昔のような堀割の復元ができないだろうかという提案なのです。道路には車も通っていますから、車をシャッターアウトするわけではない。車の交通を図りながら、しかも昔のような潤い豊かな空間がまちの中にできないだろうかという期待を込めた提案をして、これから皆さんといろいろ議論を深めましょうということだと思います。



図 - 42 堀割復元イメージ

この絵を見ただけでも、いくつか議論していかなくてはならない点がございます。例え

ば、ここは0メートル以下地帯ということですが、0メートルですから、ここは川の水は流れないわけです。ですから、ポンプで汲み上げて水を流し、循環させなければなりません。それから、現在は、車道としてたくさん交通量がありますから、その交通量をさばけるかどうか、あるいは別などかの代替の道路ができるかどうかという問題があります。しかも両側に建っている建物というのは、道路を前提にして建っていますから、お医者さんにしろお店屋さんにしろ、お客さんは車で来ます。そういうお店を開いている、あるいは事務所を開いていらっしゃる皆さんにとっての利便性の代替ができるかどうかということですが、一つの解決策のよりどころとして、西堀にしる東堀にしる、道路の中に駐車帯があります。路上駐車帯というのは、今はビルの中に駐車場がいっぱいできるようになりましたから、ああいう駐車帯は道路にはいらぬのではないか、そうすると、その空間は潤いの空間として活用できるのではないかということが端的に考えられます。それはまさに住民の皆さんの知恵の出どころとか、道路を利用している人たちとの協力関係をいかに築くことができるかということだと思えます。道路を頼りに営業している方もたくさんおられるわけですから、そういうことだと思えます。

それから、右下のイメージ図も同じことだと思えます。これは少しモダンなタイプの堀割の復活の提案だと思えます。これは積極的にバスでどんどん交通処理をやってしまおうということでしょうか、モールにしちゃうということでしょうか、自家用車を入れないでモールでやろうということかもしれません、そういうことをやっている都市もありますから、各地の都市の例なども調べながら、新潟にはどういうことができるのだろうかという研究をこれからやらなければいけないと思えます。

これ(図-43)は、郷土資料館の脇に早川堀というのを一部復元したわけです。現在の歴史博物館の脇ですけれども、小さいながら早川堀の復元をしております。こういうものが都心にあるかどうかで随分感じが違うだろうと思えます。今の場所では、利用者は少ないかもしれませんが、まちの真ん中にこういった緑の空間を提供するという意味では、非常に潤いのある空間になっていると思えます。これをずっと延ばしていきたいと、早川堀をずっと延ばしていきたいということも可能性があるかもしれません。



図 - 43 早川堀の現況

道路は駐車場として使っているのはもったいないです。やはり駐車場はビルの中に入れてもらって、民活で営業できる部分があるのではないかと。そういったことも含めて、地元の皆さんとの話し合い、そして道路を利用している人との話し合い、そういった知恵の出どころが、新潟のまちをこれから変えていく、いいきっかけになるのではないかと思います。いずれにしても、ボランティアで堀割の復活運動をやっている皆さんのエネルギー、まちづくりに対するエネルギーは大変なものです。それに対しては、高い評価をするべきではないかと私は思います。

(鈴木)

先ほどの長谷川さんのお話にあったように、明暦の町建で造られた堀というのは、信濃川をまちの中に入れ込むということと同時に、港の機能を街中に入れる。堀沿いの問屋にとっては堀が棧橋だったわけですから、新潟のまちが水都であると、先ほど歴史の話で伺ったのですが、水都であると考えするのに非常に象徴的なものだったはずなのですが、時代の歯車がうまく合わなくて、高度成長の中の国体ということで全部埋められてしまったわけですから。

(長谷川)

それは国体に間に合うということもさることながら、堀自体が0メートル地帯で水が流れなくなってしまって、私の子どもの頃もそうですけれども、川にものを捨てるという習慣があったのです。台所の屑を川に捨てる川が流してくれましたから、それが魚の餌になったわけですが、水が流れなくなってしまって堀の中に溜まってしまって、悪臭を発生するというような状況でしたから、早く堀を埋めてくれという市民の声もあったのです。

それから、江戸時代も堀の中には当然土砂が溜まりますから、堀割の清掃を地域住民が集まって、何時から何時まではここからここまでやるよと、住民が堀の泥上げをしたのです。そういう協力関係があったのですけれども、ここでもそういう協力関係ができるかどうか、新しく造った堀にも当然泥が溜まりますから。私は、堀を掘るのに一つの公共性もあると考えているのです。なぜかと言うと、雪なのです。大雪の時に雪を海岸に運んだり、信濃川に運びますけれども、これを堀に入れれば堀の水が温かいと、そこでもって溶かして流すということができる。今は雪が少ないですけれども、必ず屋根の雪下ろしをしなければいけないような大雪の年がこれから必ず来るに違いない、そういう時には堀が掘ってあるということは、豪雪対策としても安全な条件を持つことになると思います。それで、今は下水道は冬は雨が降らないから空いているわけです。ですから、下水道に雪を入れるという実験をしているのです。それは水で溶かして入れるのですけれども、そうすると、海岸まで運ばなくても下水道管で溶けた雪を運ぶことができるわけですが、堀があれば、もっと簡単にそれができるとなります。そういう意味で、堀が復元できる部分は堀を復元するというのは、非常に意味があると思っています。

(鈴木)

堀割再生の話をする、まだご健在の過去の堀を知っている方は、あんな汚いものをまた造るのかという話を聞くのですけれども、やはりよそから来た人間からなのかもしれないけれども、せっかくあったものを、私は金沢なもので道が狭いですから、新潟ほどこんなに広い道路が縦横に走っている道なら、一つや二つ堀を掘ってもいいのではないかなと内々には思っているのです。先ほどのやすらぎ堤の話で、河川空間が単なる治水や利水という空間から、ある程度狭めたとしても潤いの空間を意識して造っていくということがあんなら、車や人を運ぶ機能だけで道路を考えていたのが、よりまちの魅力を高めるための空間として使われてもいいのではないかなという気がします。交通量の問題も、海岸道路が最近、みなとトンネルと直結されました。あれでかなりのものはさばけるのかなとか。あと、最近話題になってはいますが、LRTとか、公共交通の活用などを考えていくと、いつかこんな風景が都心でも見られるようになるというの個人的には思っているのです。

(長谷川)

部分的には十分あり得ると思います。まち全体に堀をめぐらすというのはなかなか難しい状況かと思いますが、昔のような大きな幅の堀でなくても、金沢市は小さな水路をまちの中に流していますけれども、新潟でもそういうことができます。新潟はさっき歴史博物館の脇を紹介しましたが、実は白山神社の脇にも小さな水路を造っているのに気づいていらっしゃいますか、あれはちょっと小さすぎて、憩いの空間と言うには物足りないかもしれませんが、でも、水が流れているというのは落ち着く空間になっています。そういう努力をこれからもあちこちで、できるだけのことやっていくことがいいのではないかと思います。

これ(図 - 44)は海の話で出ました海岸です。先ほど申しましたように、日本一市街地に近いところまで海岸侵食が進んだまちなってしまいましたので、テトラポットをやって離岸堤をやってはいるのですが、最近、珊瑚礁工法というすばらしい工法を取り入れた海岸の侵食対策が進んでいます。これは珊瑚礁工法と名前の通りでありまして、珊瑚礁というのは浅い海にずっと長く、太陽の光を受けながら珊瑚礁は発達するわけです。ですから、島の周りに珊瑚礁が幅広くずっと生えていくわけです。そうすると、大波が来ても珊瑚礁で波がくだけまして、渚にくる頃にはさざ波になるということです。ですから、それにヒントを得て、渚線から奥の方に、海の水面の下に堤防を造っているわけです。ですから、この堤防の上をヨット程度の船が通れる、そういう工法なのです。これによってここで波が砕けて、渚を守るという工法を新潟で初めて採用していただいて、やっていただいたわけです。当時の運輸省と建設省両方でやっていただきました。これは建設省のつけた名前なのですが、そういうことで新潟海岸をやっていただいているので、いつの間にかテトラポットの姿が見えないと思われる部分があるかもしれませんが、実はその下にこういうものができてきているということなのです。



図 - 44 海岸の珊瑚礁工法

これは、堤の幅があまり狭いと、波が越えていくだけなのですけれども、これが長くなればなるほど波がここでやわらぎ、さざ波になるのです。ですから、これを長くすると大変お金がかかるということです。テトラポットにしても少しずつ沈んでいきますから上に重ねていくのですが、これもお金がかかるので、こういう大事業は国でなければなかなかできないと思うのですが、新潟海岸は政令都市・新潟を守るという大事業をやっていただいている。姿は見えないのですけれども、こういう大事業をやっていただいているのだということを皆さんご理解いただけたらいいと、これによって私ども海岸の利用が、昔みたいに幅広い砂浜の中でいろいろなイベントにも使えるわけです。よくなるかなと思います。

(鈴木)

最近、話に聞くのですけれども、そこでサザエとかアワビもとれるのだという話で。

(長谷川)

テトラポットのところにも意外にサザエ、アワビがとれるのです。夏は売り出しています。バーベキューなんか最高です。こういったところでもビーチで遊ぶという、私どもは海に行くと言うと泳ぎに行くでしょう。ヨーロッパは違うのです。海へ行くというのをビーチに行くというのです。ビーチ遊びが非常に盛んなのです。陽にあたりに行くわけです。ウィンドサーフィンとかありますけれども、ビーチバレーをやったりして、そういうようにビーチで遊ぶという習慣が向こうにある。日本もだんだんそうってきています。プールで泳ぎますから、海では広い空間の中でビーチで遊ぶということに、だんだん変わっていくかもしれないと思っています。

(鈴木)

砂浜が少しでも復活すれば、そういう習慣が、今は新潟の人は海岸で遊ぶとか、海で遊ぶというのに遠ざかってきたのかもしれませんが、本当にもったいないと思います。歩いて何分もかからないところでヨットに乗れば、水遊びもできるということは本当にはないですね。

(長谷川)

そうですね。スポーツカイトというのでしょうか、西洋式の凧上げも随分ここでやって

いて、小針浜の辺りは随分盛んです。スポーツカイトとかウィンドサーフィンとかよく見かけます。

これ（図 - 45）は、田園型政令指定都市を目指すということの一つに、農業生産をいかに上げていくかということが大きな課題だと思っています。お米も随分おいしいコシヒカリができていますけれども、こういう新潟名産、十全ナスの浅漬けとか、黒埼の茶豆とか、内野のスイカとかたくさんあるわけですけれども、こういう新潟ならではの食べ物を私ども住民自身が評価して手に入れることが大事なのです。結局、篤農家がいくらいいものを作っても、売れなければ作られないわけです。一生懸命商品開発をする篤農家や、有機栽培をした篤農家と消費者がいかにネットワークしていくかということが、これから非常に大きな課題だと思っています。それには、これはいいものですよという銘柄を、これは新潟市が指定した名産品なのですけれども、市でなくても商工会議所でも農協でもどこでもいいわけですけれども、これは皆さんにご推奨できる品物ですよとした時にそれを市民が買ってあげる、買ってあげるというのは変ですけれども、おいしいから買うのですけれども、消費者とのつなぎ具合、ネットワークを作るといことが農家にとってもものすごい励ましになるわけです。そういうことが、これから大きな政策になっていくべきではないかと、そんな思いをいたしております。

女池菜というのも古くからの伝統的な菜っ葉です。雪を被るから柔らかいので、雪を被って柔らかい菜っ葉を食べる。ホワイト阿賀というテッポウユリなのですが、新潟で新しく開発されたユリでありまして、ユリの球根の一片一片を種にして作ると1年で花が咲くという大変すばらしい、これも技術開発の成果なのですが、そういったものを作りだしています。最近イチゴ、越後姫をロシアへ輸出するとか、いろいろな話が出てきているのです。つまりロシアだとか中国に購買力がついてきている。購買力がついてきたところが、日本のおいしいものを食べたいといって、日本の農産物を輸入するというような時代になってきているのです。逆に私どもの新潟に住んでいる人たちが新潟の名産品を口にしないというか、普段食べているものですから、あまり評価をしていないようなところがありますので、再認識をしながら新潟の名産品を育てるためには、私どもが新潟の名産品を買う、そしていいものを作っている農家を育てるといネットワークづくりが必要なのではないかなと思います。何しろ今度、政令指定都市新潟は、日本一の水田面積（26,000ha）を持つまちになるのです。新潟の次は秋田の八郎潟の大潟町なのです。その大潟町（11,000ha）の倍の水田面積を持っているのです。1位と2位で倍の差があるのです。そのくらい蒲原平野の水田というのは大きな面積を持っています。ですから、蒲原平野の農業生産がいかに上がっていくか、いいものを作りだしていくかというのが、政令都市にとっても大きな課題かなと、一つの進むべき道ではないかと思っています。そこに水を配っているのは、実は信濃川だということなので、信濃川の治水をして、信濃川の利水をいかにうまくするというのが非常に大事なことです。ご承知のように川の水というのは反復利用です。西川の水だって、あちこちの田んぼで使った水がまた西川に流れてくる、それを下流でとって、また田んぼに流すという反復利用です。そういう相互依存関係にあります。今度は政令都市一つですから、一つの政令都市の中で調整をしていく、意思決定が単純化されているわけですから、そういう意味では合併をする成果があるのではないかと考えています。

これ（図 - 45 その2）は、古いデータで恐縮です。旧新潟市の中での名産品の産地を図面にしたものです。これは今度、蒲原平野全体に広がりますから、あちこちで白根の果物だとか、いろいろなものが加わってくるわけです。巻へ行けば柿があったりします。そういったものが、日本に誇る新潟の名産品が、この政令都市の中にたくさん出てくるわけ



図 - 45 (その1) 旧新潟市域での特産品

です。ル・レクチェなんかもありますし、そういったものを並べて、市民がこれを支援しようという形になると、みんなの力が協力しあって、いいまちに発展していくのではないかなと、生産力を生み出すのではないかなと思います。

冒頭の図面に戻りましたが、これだけの広がりを持った蒲原平野でございます。この中で我々は協力しあっていいまちを作ろう、協力していいまちを作ろうという合併ですから、途中の段階でいろいろな苦労もあると思いますけれども、力を合わせて、明治時代の人の大構想に負けられないような、政令都市になるとということは、大河津とか沼垂との合併に勝るとも劣らない大事業だと思うのです。それを後世の人も合併して政令都市になってよかったなと言っただけのようなまちにするかどうかというのは、今生きている我々の仕事ではないかなと、平成の人たちはえらいことをやってくれたのだと思えるようにしていけないといけないと思います(図 - 46)。

(鈴木)

どうもありがとうございます。ずっと歴史から始まって、将来への展望までを含めてお話を伺いました。川だけではなくて、潟や海も含めた魅力を生かしていく。そこに川が育ててくれた農産物、食や花の魅力も取り込みながら、水辺の都市と川が育てた生産力というものを合わせた魅力的なまちにしたいというお話だったと思います。

それで、締めくくりになるわけですがけれども、今回 12 回の講座の締めくくり、それから来年度からは話をお聞きしているところによると、単に信濃川だけではなくて、一本の水系でつながれている上流の千曲川、その連携の中で、さらに今回のように広がりのある勉強というか、話をしていきたいという構想をお持ちだと伺っています。最初に言ったように終着地であり、信濃川の恩恵も、それから信濃川の苦しさも一番知っている新潟のまちに育ち、そのまちの行政をあずかった人としてこれからの信濃川全体を、今は新潟だけのお話を伺いましたけれども、それを生かしていく地域づくりとか交流のあり方について、



図 - 45 (その2) 旧新潟市域での特産品



図 - 46 新潟都市圏域図

何か一言ご意見、ご提言があればいただきたいと思います。

(長谷川)

信濃川によって作られた平野に、私どもはまちを作って住んでいるわけですが、川を守る、あるいは川を治めるといふのは、水系一貫という言葉があります。水の系統、水系といふのは一貫して治水をしていかなければいけない。水の利用も水系全体の中で考えていかななくてはいけないことだと思ふのです。そういう意味で、最上流の地域の人たちと最下流の我々も含めた全体の中で信濃川はどうやって守っていこうか、どうやって利用していこうかということ議論する場ができると非常にありがたいことだと思ふます。その中で当然、為政者だけでやるのではなくて市民を巻き込んで、市民の皆さんにとっての信濃川ですから、そういう意味で市民の皆さんもそれに深い理解をして、協力していくというような世論づくりができれば素晴らしいことだと思ふます。先ほどもちょっと申し上げましたけれども、新潟は信濃川の水の反復利用水を使っているわけですが、反復して、長野県で使った水が下水を流して川に出てきたものをまた地域で使って、長岡で使って、またそれを新潟で使ってと、反復して利用しているわけですが、これは上流を含めて水質の保全ということについて一貫してやっていただかないと、下流側は暮らしにくくなるわけですが、今、新潟は鳥屋野潟のところに高度浄水装置を造りました。2メートルもあるような炭素の層を流してきれいな水が出て、水をボトルに詰めて売るといふほどきれいな水を作るようになりましたけれども、それを信濃川の水、阿賀野川でも使っています。今のところ水質はどんどんよくなってきつつあるのですが、これをもっと上流とも相談しあって信濃川に清水が流れる、本当はアユの姿が見たいと思ふます。信濃川を上ってくるサケ、上ってくるアユの姿が柳都大橋のところで見えるようになれば、それは素晴らしいまちづくりにつながる。それは上流の人の協力なくしてはできません。それは我々も上流に対していろいろな意味で協力をしていかなければならない課題があると思ふますが、そういう話し合いをすること自体、話し合いの場ができること自体、素晴らしいことではないかと思ふます。

(鈴木)

どうもありがとうございました。予定の時刻になるかとしているのですが、せっかくの機会ですので、講師の長谷川さんにご質問とかご意見があれば二、三お受けしたいと思ふのですが、いかがでしょうか。

(会場)

中身の濃い、感銘深いお話をありがとうございました。一つ、大河津分水の重要性ということもよく理解できたわけですが、大河津分水には桜があるのですが、先ほど先生のお話の中で堤防と桜の木との関係のお話がありましたけれども、あそこでは桜を守る会というのがありまして一生懸命やっているのですが、あれがもし堤防に悪いということがあるとすれば、大河津分水が破堤した場合には、新潟はこの辺まで全部湖になるわけですが、それよりも先に私は大河津分水のすぐそばに生まれ育ち、今も住んでいるのですが、真っ先に水の底に沈んでしまうわけですが、非常に切実に思っているのですが、ああいう堤防と桜の木との関係について、もう少し詳しく教えていただきたいと思います。

(長谷川)

大専門家がおられましたので。

(五百川)

この3月まで信濃川大河津資料館の館長をしておりました五百川でございますが、今のご懸念は、資料館の講座でも話題になったことがございましたが、ご指摘されたとおりやすらぎ堤と同じで、埋め立てした外側のところに桜の木が移植されていまして、一切加治

川の堤防のように治水機能に影響を与えるような植樹ではございませんので、今、燕市当局も長岡市、分水路の左岸が今度は長岡市ですから、一体になって桜の堤防づくりは今後さらに若木が植えられて、10年くらいすると、かつての華やかな分水路の桜の名所ができる。しかも、今度は安全で安心してやれるということで、その点は今のご質問に対して大河津分水路の桜に関しては、一切そういう心配がここ数年の工事によって取り除かれたということで、ご安心いただけるのではないかと思います。

一つ私のから質問がございます。先ほどの長谷川先生のご講演で、新潟駅の改修というのは非常に大きな意味があって、これについては無駄な公共工事という観点でのご批判もあると日報紙上の記事にも出ておりますが、新潟市の発展の基軸は、一つは越後平野の長岡、新潟枢軸というものが、越後平野の発展の大きな軸になっているわけです。たまたま長岡藩領であった新潟ということで長岡の城下と結ばれまして、そして信濃川水運、さらには新幹線に至る長岡、新潟の枢軸が新潟の越後平野の発展の非常に大きな軸になる。それから、新潟市域で言えば、砂山から信濃川に向かい、そしてさらに新潟の市域を拡大するために信濃川に大河津分水による埋立が行われ、そして橋が架かった。萬代橋の持っている意義は、そういう点があると思います。

ところが、越後平野全体へ市域が広がりますと、さきほどの資料館講座もそうですが、今の新潟駅が明らかに、かつての信濃川のように新潟の発展の巨大な壁を作っているという現状があると思います。そういう意味で言えば、是非、在来線を上げて南北を貫いて鳥屋野潟に向かい、さらに亀田郷に向い、新津に向かうという、いわば次の信濃川講座に関連するのですが、阿賀野川をおいた、かつて明治の先人が二つの大河、信濃川だけを問題にしないで阿賀野川、"信阿"両大河を問題にしたという発想が、これからも政令大都市・新潟の構想にあって然るべきですし、そういう意味で市民の皆様から、やがて今の白山島、寄居から白山島におりてきて、さらに萬代橋を架けて、今まで新潟と呼ばれていなかった土地が東新潟と呼ばれるようになった。さらに先に、今の障害になっている新潟駅の存在を大きく変革すると、こういう工事は決して新潟市の将来にとって無駄でなくて、後に続く人たちに大きな発展への希望を持たせる工事であるという意味で理解する時に、是非、信濃川大学が阿賀野川を含めた政令・新潟市にふさわしい、あそこに白地で広がっている姿が、赤地ではなくて緑の田園という形での新たな大都市・新潟の建設につながるという意味でも、新・新潟駅の改修を単なる無駄な公共工事という意味だけで理解されないような、そういう発展構想の下にお考えを、長谷川先生からさらなるご尽力をいただければと思います。そういう意見を付け加えて、どうも失礼いたしました。

(長谷川)

ありがとうございました。

(会場)

今、五百川さんのお話で、確かに桜の木は古い木はそのままにしておいて、新しい木を少し離れたところに植えつつあります。言ってみれば、植え替えている。今までやったことは、誤りだったということだと思ふのです。前に植えていた時はやっぱり危なかったと。ソメイヨシノは寿命60年ということで、もうほとんど老木化しておりますけれども、それだけに根っこの方はどんな状況か、この間も水が上に上がってきて、もう少しで破堤しそうになったのですが、あの状態が長い時間続くと、堤防の下の方が軟らかくなっていくわけです。危険がさらに増すのは、老木の根っこだと思ふのです。そういうことから言うと、確かに五百川さんからお話があったように古い木がなくなって行って、新しきに今変わりつつあるということで、今は途上ということだと思ふのです。ということは、まだまだ危険な状態が続いているということの意味するのではないかなと、ちょっと付け加えておきます。心配です。

(長谷川)

貴重なご意見があったということで、今日の河川担当の方もおられるので、責任があるので、すぐにはご回答できない人たちかもしれないので、お伝えしたいと思います。

(鈴木)

ありがとうございます。それでは、他によろしいでしょうか。長時間にわたりどうもありがとうございます。今日、新潟のまちの歴史、それと信濃川のかかわりということでお話をいただきました。一つの区切りを迎えて、また新しく進んでいくわけですがけれども、私は一言だけ言わせていただきます。

水というのは、よく命の象徴だと言われます。人間の身体も 90 パーセントくらいが水です。もう一つ象徴しているのは、水というのはつながり、かつて海運も水運も含めて水上輸送というのがその中心になったし、最近よく言われる森が海を育てるとか、海が森を育てるというのも、川の流れる水を通じてサケが上っていったり、山や森の養分が下っていったりということで、つながりという意味での象徴でも、きっと水というのはあるのだろうなと。だから、こういう多様な機能を生んでくる。これまで、新潟県内の信濃川流域ということでやってきましたけれども、それをさらに長野、先ほど長谷川さんがおっしゃられた水系一貫と言いますか、人と人をつなぐ水というものでもっとつながっていきこうと、その中から新しい価値観とか生き方というものを考えていくことができたらいいなと思っています。新潟というまちの名前が初めて文献に登場した時は、さんずい偏の潟ではなくて、新しい方向の方という字を使い、「新方」と書いた。新しくできていくまちだという意味合いもあったのではないかという説もあります。これまでの講座で信濃川を考え、さらに他地域との連携をしていくことで、新潟がこれから政令都市として発展していく新しい方向性みたいなものが、考えられたのではないかと思っています。今日は長谷川さん、どうもありがとうございました。どうも皆さん、長時間、ありがとうございました。

(司会)

長谷川理事長、鈴木編集委員、ありがとうございました。皆様、お二人に盛大な拍手をもう一度お願いいたします。

以上をもちまして、「われら信濃川を愛する『信濃川自由大学』」第 12 回講座を終了いたします。本日は、長時間にわたりご参加いただきまして、誠にありがとうございました。